

平成24年度

研究活動報告



桜美林大学 加齢・発達研究所

平成24年度 研究活動報告

研究員（常勤）研究活動報告

1) 芳賀 博	1
2) 新野 直明	5
3) 長田 久雄	7
4) 白澤 政和	9
5) 杉澤 秀博	16
6) 渡辺修一郎	19
7) 直井 道子	23

客員研究員研究活動報告

1) 植木 章三	26
2) 河合千恵子	29
3) 澤岡 詩野	31
4) 柴 喜崇	33
5) 仙波由加里	36
6) 三澤 久恵	39
7) 兪今 (YU JIN)	42

連携研究員研究活動報告

1) 植田 大雅	44
2) 上野 佳代	45
3) 遠田 恵子	47
4) 木本 明恵	49
5) 久喜美知子	50
6) 久米喜代美	53
7) 小浦さい子	55
8) 齋藤 崇志	56
9) 高橋千由利	58
10) 竹之下信子	60
11) 東方 和子	61
12) 徳田 直子	62
13) 中辻 萬治	64
14) 平林 規好	67
15) 堀内 裕子	68
16) 前田志名子	72
17) 宮崎 和美	74
18) 吉田 綾子	75

はじめに

桜美林大学加齢・発達研究所の平成24年度研究活動報告書をお届けいたします。

今年度の研究所組織は、老年学研究科特任教授並びに教授7名の研究員に加えて、学外の客員研究員7名、さらには、研究員と共同で研究を進める連携研究員19名で構成されています。

本報告書は、上記の研究メンバーによる平成24年度の研究活動の概要、研究業績及び外部からの研究助成の状況などについてまとめたものです。今年度も、高齢者のサクセスフル・エイジングを念頭においた、医学的、心理学的、社会・福祉学的側面からの課題解明に向けて多岐にわたる調査研究活動が展開されました。その成果を、論文、著書として刊行したほか、内外の学術集会において多数の発表がなされました。これらの業績一覧は、当研究所ホームページにも掲載しています。

また、研究員の意欲的な研究活動が、日本学術振興会を初めとして多くの外部研究費の獲得につながっている様子が研究員諸氏の活動報告からうかがえます。

今後、さらに研究活動を深化させることはもちろんのこと、これまでの研究活動で得られた成果を広く地域社会へ還元・貢献する事業の展開も研究所の役割であると考えています。

今後とも当研究所に対するご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

2013年3月

桜美林大学加齢・発達研究所

所 長 芳 賀 博

1. 研究課題

- (1) 高齢者の役割づくりに基づく社会的ネットワークの形成に関する地域介入研究
- (2) 高齢者の筋骨格系の痛みの変化が生活機能に及ぼす影響
- (3) 高齢者ボランティアによる介護予防に関する研究
- (4) 地域包括ケアを支える医療機関と保険者機能連携に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の役割づくりに基づく社会的ネットワークの形成に関する地域介入研究

本研究は、高齢者の体力レベルに応じた「地域社会（家庭外）での役割」の見直しと発掘を行い、それらの実践への応用が地域高齢者の社会的ネットワークの形成と促進にどの程度影響するのかを検証するとともに、健康増進効果や生きがい・生活満足度への波及効果を明らかにすることを目的としている。今年度は、3年計画の最終年にあたり、神奈川県座間市のS自治会住民によるSAKURAプロジェクトで取り上げた活動を継続した。プロジェクトは、ウォーク（運動）、塾（子どもに教える）、サロン（社会との係り）から構成され、それぞれシニア世代が役割を担い活動を推進した。また、S自治会へのSAKURAプロジェクトの普及のための広報活動（ちいき活動通信）も継続して行った。本研究は、計画－実施－経過評価を繰り返しながらの参加型アクションリサーチの手法に基づいており、現在、効果評価のための追跡調査を実施中である。活動の経過評価については、学会での発表も行った。

(2) 高齢者の筋骨格系の痛みの変化が生活機能に及ぼす影響

本研究は、高齢者の筋骨格系の痛みの変化が生活機能（IADL、知的能動性、社会活動）の変化に及ぼす影響を縦断調査により明らかにすることを目的としている。75歳以上の高齢者259名を対象とし、1年間の痛みの変化の違いと生活機能の得点の変化を分析した。痛み継続群は101名（39.0%）、痛み消失群は30名（11.6%）、痛み出現群は49名（18.9%）、痛みなし群は79名（30.5%）となった。初回調査時と追跡調査時の生活機能の得点比較において、痛み継続群および痛み出現群で社会活動（個人的活動）に有意な低下が認められた。一方、痛みなし群では生活機能に有意な変化が見られなかった。痛みの解消や発生予防が社会活動の低下を抑制する可能性が示唆された。本研究の成果は学術誌にも掲載された。

(3) 高齢者ボランティアによる介護予防に関する研究

本研究は、高齢化の進む農村地域（宮城県T市）の高齢者を対象として、介護予防を目的とした高齢ボランティアによる2タイプの活動プログラム（農作業型運動プログラム、森林浴型運動プログラム）を展開し、これらのプログラム実施地区における活動の効果を対照地区と比較することを目的としている。プログラム実施地区には、高齢者ボランティアが指導を行う軽運動プログラムのパンフレットならびにDVD映像などの教材を作成し提供した。今年度は、3年目の最終年度にあたり、高齢者ボランティアによる自主活動の支援を継続するとともに、評価のための追跡調査を行った。現在、そのデータ整理及び入力作業を実施中である。

(4) 地域包括ケアを支える医療機関と保険者機能連携に関する研究

高齢者が安心して過ごすことができる地域社会の実現のためには、医療・介護・予防・住まい・生活支援の各サービスを住み慣れた生活圏の中で切れ目なく提供し、支援していく「地域包括ケア」体制の確立が望まれている。本研究は、地域における介護と医療の連携の試みが進んでいる札幌市手稲区をフィールドとしている。65歳以上高齢者（要介護高齢者・一般高齢者5,000名）の在宅での医療ニーズや生活支援ニーズ等の実態把握を行うとともに、診療所（72施設）や訪問看護ステーション（6施設）が24時間の在宅医療体制を確立するうえで必要なニーズ等を明らかにすること、また、これらの現状やニーズを踏まえた上で、地域包括ケアにおける在宅医療の取り組みの現状、診療所・訪問看護ステーションへの支援や連携の課題、解決策並びに保険者に期待すること等を質的方法により検討することである。さらには、保険者機能の発揮が期待されている中で、地域包括ケアを支える医療機関と保険者機能との連携を図るための方策や課題を明らかにし、今後の地域包括ケアの推進に役立てることを目的としている。今年度内に報告書作成の予定である。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 芳賀博、高齢者の保健医療対策；保健医療サービス 第2版（社会福祉士シリーズ 17）福祉臨床シリーズ編集委員会編、弘文堂、56-64、2013年

【論文】

- 1) 安齋紗保理、柴喜崇、芳賀博、地域在住高齢者における骨・関節系の痛みの変化が生活機能に及ぼす影響、応用老年学、6、70-78、2012.
- 2) 芳賀博、高齢期における社会参加活動の意義、Aging & Health、21（1）、6-7、2012.
- 3) 芳賀博、社会参加を通じた住民主体の健康長寿のまちづくり、Dia News、3-6、2012.
- 4) Hoshi M, Hozawa A, Kuriyama S, Nakaya N, Ohmori-Matsuda K, Sone T, Kakizaki M, Niu K, Fujita K, Ueki S, Haga H, Nagatomi R, Tsuji I, The predictive power of physical function assessed by questionnaire and physical performance measures for subsequent disability, Aging Clinical and Experimental Research, 24, 345-353, 2012.

- 5) 竹之下信子、芳賀博、地域在宅高齢者の自己実現に関連する要因、老年学雑誌、第3号、1-18、2013.
- 6) 林雅子、芳賀博、ジェロトランセンデンスからみた超高齢者のサクセスフル・エイジング、老年学雑誌、第3号、35-51、2013.

【学会発表】

I. 教育講演・シンポジウム

- 1) 芳賀博、教育講演6、アクションリサーチによるまちづくり、第54回日本老年社会学会、佐久、2012年6月
- 2) 芳賀博、シンポジウム「多世代共生による持続可能な長寿活力社会に向けた保健福祉の活動と参加」、高齢者の社会参加による健康長寿のまちづくり、第25回日本保健福祉学会学術集会、広島県三原、2012年10月

II. 一般演題

- 1) 佐藤美由紀、斉藤恭平、安齋紗保理、岡本秀明、高橋和子、山崎幸子、木村みどり、大沼由香、安村誠司、芳賀博、アクションリサーチによる都市部高齢者の役割の見直しに基づく地域活動創出の介入過程、第54回日本老年社会学会、佐久、2012年6月
- 2) 山科典子、上出直人、柴喜崇、河村晃依、水野公輔、芳賀博、都市部高齢者における社会関連性と生活機能との関連、第54回日本老年社会学会、佐久、2012年6月
- 3) 佐藤美由紀、斉藤恭平、若山好美、堀籠はるえ、鈴木祐子、矢野麗子、芳賀博、住民が高齢者に期待する役割と関連要因－地域在住の成人とシニアへのフォーカスグループインタビューによる検討－、第25回日本保健福祉学会学術集会、広島県三原、2012年10月
- 4) 岡本秀明、安齋紗保理、佐藤美由紀、斉藤恭平、木村みどり、山崎幸子、安村誠司、大沼由香、高橋和子、芳賀博、高齢者のボランティア活動および社会活動と他者・社会への貢献に関する満足度との関連、第71回日本公衆衛生学会総会、山口、2012年10月
- 5) 大沼由香、高橋和子、平尾由美子、関戸好子、芳賀博、町内会活動で展開する地域高齢者のネットワーク形成の試み、第71回日本公衆衛生学会総会、山口、2012年10月
- 6) 植木章三、高戸仁郎、犬塚剛、入江由香子、荒山直子、本田春彦、吉田裕人、芳賀博、農地や森林での活動を視野に入れた高齢者自主運動プログラムの提案、第71回日本公衆衛生学会総会、山口、2012年10月
- 7) 高戸仁郎、植木章三、犬塚剛、入江由香子、荒山直子、本田春彦、吉田裕人、芳賀博、地域在住高齢者の運動における行動変容ステージと健康体力関連要因、第71回日本公衆衛生学会総会、山口、2012年10月
- 8) 吉田裕人、入江由香子、植木章三、高戸仁郎、犬塚剛、荒山直子、本田春彦、芳賀博、基本チェックリストの二次予防事業対象者選定項目群が将来の医療費に及ぼすインパクト、第71回日本公衆衛生学会総会、山口、2012年10月

- 9) 本田春彦、植木章三、河西敏幸、高戸仁郎、犬塚剛、入江由香子、荒山直子、芳賀博、地域在住高齢者における包括的抑うつ予防プログラムの実践と評価（第一報）、第71回日本公衆衛生学会総会、山口、2012年10月
- 10) 佐藤美由紀、斉藤恭平、芳賀博、地域のつながりづくりを広げるキャンペーン活動の評価、第16回日本健康福祉政策学会学術集会、東京、2012年11月
- 11) 安齋紗保理、芳賀博、植木章三、地域在住高齢者の社会・心理・身体的要因に骨・関節系の痛みが及ぼす影響：痛みの出現部位に着目して、第7回日本応用老年学会、横浜、2012年11月

【科研費などの助成金】

- 1) 科学研究費 基盤研究（B）
研究課題名：高齢者の役割づくりに基づくネットワークの形成に関する地域介入研究
（研究代表者）
- 2) 科学研究費 基盤研究（B）
研究課題名：農地や森林の活用を視野に入れた高齢者の自主活動が介護予防に寄与できるか
（分担研究者）
- 3) 科学研究費 基盤研究（C）
研究課題名：高齢者の地域社会における役割の見直しに基づくヘルスプロモーションプログラムの評価（分担研究者）
- 4) 平成24年度老人保健健康増進等事業
研究課題名：地域包括ケアを支える医療機関と保険者機能連携に関する調査研究事業
（研究代表者）
- 5) 受託研究（コトブキ）
研究課題名：屋外型高齢者遊具の利活用に関する研究（研究代表者）

1. 研究課題

介護予防に関する研究

2. 研究活動の概要

東京都中央区で転倒予防教室を実施し、その効果を検討する試みを継続した。転倒予防教室は、1回10～15名の住民に対して、運動、講義、フットケアなどからなる2時間程度のプログラムを1週間間隔で4回提供し、さらに、約1年後にフォローアップとして同様のプログラムを実施するという内容である。今年度のフォローアップは、2011年度教室参加者に実施した。今年度は、昨年度まで用いていた住宅模型による危険環境の説明を含むプログラムに加え、転倒予防のための教育用冊子、ならびに壁掛け教材、タオル教材、マグネット、ステッカーの啓発用教材を使用する包括的転倒予防教育「SAFETY on! 12週間プログラム」と称する教育プログラムを開発した。転倒発生、筋力や歩行能力などの身体的要素、満足度やうつ状態などの精神的要素、人間関係などの社会的要素に対する効果について、前後比較、教材を使用しなかった対照群との比較からこの包括的教育プログラムの効果に関する分析・検討を行う予定である。

さらに、同中央区内で、認知症予防活動をも想定した、世代間交流プログラムの企画、運営に参加、協力した。

また、東京都立川市の老人ホームにおいて、転倒予防プログラムとして運動・体操教室を企画、実施した。体操に加え、ノルディックウォーキングも用いたプログラムを継続しており、その効果について検討中である。

その他に、研究員とともに考案したプログラム（ハッピープログラム）による地域高齢者のうつ予防を目的とした活動・研究を継続した。今年度は、東京都府中市に加え新潟県長岡市でプログラムを用いた教室を開始し、今後、効果に関する調査、分析を行う予定である。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 新野直明：高齢者虐待、臨床リハ、21巻、597-601、2012
- 2) 松本直人、新野直明、他：慢性閉塞性肺疾患患者における休息姿勢の選択傾向と主観的有効性、老年学雑誌、2巻、87-96、2012
- 3) 久喜美知子、新野直明：虚弱高齢者の食生活の実態～独居と同居の比較～、華学園栄養専門学校研究紀要、1巻、6-11、2012

【学会発表】

- 1) 三澤久恵、新野直明、他：郊外の地域高齢者のスピリチュアリティと関連要因、第17回日本老年看護学会学術集会. 金沢、2012年7月
- 2) 松本直人、新野直明、他：高齢COPD患者における休息姿勢の選択とBMIの関係、第67回日本体力医学会、岐阜、2012年9月
- 3) 久喜美知子、新野直明：虚弱高齢者の食生活の実態～独居と同居の比較～、第59回日本栄養改善学会学術総会、名古屋、2012年9月
- 4) 八島妙子、新野直明：地域在住高齢者の生活リズムの変化、第19回日本未病システム学会、金沢、2012年10月
- 5) 松本直人、新野直明、他：地域在住高齢喘息患者における休息姿勢の主観的有効性、第71回日本公衆衛生学会、山口、2012年10月
- 6) 平松万由子、新野直明：認知症グループホームのケアスタッフが認識する「終末期ケアにおける連携」に関連する内容の検討、第22回日本健康医学会、三重、2012年11月

【科研費などの助成金】

- 1) 文科省科研費基盤B：在宅認知症高齢者のための学際的チームの連携強化を支援する評価システムの開発と検証（分担）
- 2) 文科省科研費挑戦的萌芽研究：地域高齢者のための包括的転倒予防SAFETY on！プログラムの開発と効果の検証（分担）
- 3) 文科省科研費基盤C：高齢者のうつ予防のためのポピュレーションアプローチの実証研究（分担）

【その他・講演】

- 1) 「高齢期に起こりやすい精神的・心理的变化について」、桜美林大学大学院老年学研究科 2012年度夏季公開講座、2012年6月
- 2) 「高齢者の転倒のメカニズムと予防について」、社会福祉法人至誠学舎立川至誠ホーム 国分寺地域相談センターなみき介護予防教室、2012年7月

1. 研究課題

- (1) ハンセン病療養所入所者におけるライフレビュー
- (2) 心理機能の発達と加齢に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) ハンセン病療養所入所者におけるライフレビュー

本年度は、多摩全生園の入居者の調査に向けた文献収集および関係者との連絡調整を行った。

(2) 心理機能の発達と加齢に関する研究

高齢者の食物選択動機、高齢者の情動統制と関連要因、患者と看護師の共依存の影響、高齢者におけるPosttraumatic Growthと抑うつ状態との関連、入院患児に対する遊びサポート、後期高齢男性の主観的幸福感と生き方との関連、対人援助職の職業生活出来事とうつ状態との関連、介護福祉施設入居待機者の特性に関して研究を行い発表した。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 今井幸充・長田久雄著、認知症のADLとBPSD評価測度、共著、ワールドプランニング；東京、2012. 5. 20
- 2) 森和代・石川利江・茂木俊彦編、よくわかる健康心理学、分担執筆、長田久雄 高齢者の健康教育VI-7、ミネルヴァ書房；京都、2012. 8. 20. 166-167

【論文】

- 1) 辛島順子・長田久雄、2型糖尿病患者のセルフエフィカシーに着目した栄養食事指導、2012. 7. 10、医学と生物学、第156巻第7号、467-472
- 2) 今井忠則・長田久雄・西村芳貢、生きがい意識尺度 (Ikigai-9) の信頼性と妥当性の検討、2012. 7. 15、日本公衆衛生雑誌、第9号第7巻、433-439
- 3) 長田久雄・石原房子、文献にみるエビデンスに基づく認知症の非薬物的アプローチ、2012. 9. 30、高次脳機能研究 (旧失語症研究)、32巻3号、461-467

【学会発表】

- 1) 加藤佐千子・長田久雄、生活機能の高い高齢者の食物選択動機項目の抽出と食物選択動機因子が食物摂取へ及ぼす影響、2012. 5. 11-13、日本家政学会研究発表要旨集、76、日本家政学会第64回大会、大阪市立大学
- 2) Ikeuchi, T., & Osada, H., Associated factors in forming emotion regulation of Japanese older adults, 2012. 8. 2-5, American Psychological Association 120th Annual Convention Program 2012, 275, 120th Annual Convention of the American Psychological Association, Orlando, Florida, USA.
- 3) H. Mori, H. Osada, Relation between adherence, support request and codependent tendency in middleaged chronic patients in Japan, 2012. 8. 21-25, EHPS 2012 abstracts, Psychology & Health, 27 : sup1, 280, European Health Psychology Society (EHPS) , Prague, Czech Republic
- 4) F. Ishihara, H. Osada, Posttraumatic growth and depressive state in Japanese older adults, 2012. 8. 21-25, EHPS 2012 abstracts, Psychology & Health, 27 : sup1, 231, European Health Psychology Society (EHPS) , Prague, Czech Republic
- 5) R. Takahashi, K. Yamamoto, T. Kazama, Y. Inoue, H. Osada, Play support for hospitalized children in Japanese hospitals conducted by nurses, 2012. 8. 21-25, EHPS 2012 abstracts, Psychology & Health, 27 : sup1, 337, European Health Psychology Society (EHPS) , Prague, Czech Republic
- 6) 青木律子・服部紀子・長田久雄・中澤明美、後期高齢男性の主観的幸福感と生き方との関連－活動能力高低群間の比較－、2012. 9. 1-2、日本健康心理学会第25回大会発表論文集、133、日本健康心理学会、東京家政大学板橋キャンパス
- 7) 森本寛訓・長田久雄、対人援助職者の職業生活出来事とうつ状態との関係－ポジティブ感情とネガティブ感情をふまえて－、2012. 9. 13、日本心理学会第76回大会発表論文集、日本心理学会第76回大会、専修大学
- 8) Ikeuchi, T., Komiya, H., & Osada, H., Concerns of Japanese caregivers waiting placement of family members in long-term public facility, 2012. 11. 14-18, The Gerontologist Program Abstracts 65th Annual Scientific Meeting, Gerontological Society of America 65th Annual Scientific Meeting, San Diego, California, USA.

【科研費などの助成金】

- 1) ハンセン病療養所入所者におけるライフレビュー（課題番号24530888分担研究者）

1. 研究課題

- (1) 高齢者の地域のネットワークづくりの方法
- (2) ケアマネジメントの効果について
- (3) 災害時のソーシャルワークについて
- (4) 高齢者ケアマネジメントと障害者ケアマネジメントの共通点と相違性

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の地域のネットワークづくりの方法

これについては、実践的な観点から個人支援と地域支援を結びつけることとして、地域のネットワークづくりについて一定の研究成果を得ることが出来た。特に、支援困難事例の検討から地域のニーズを導きだし、ニーズ充足方法についての実証的な成果をあげることが出来た。以上は、2013年2月に刊行された『地域のネットワークづくりの方法—地域包括ケアの推進に向けて』（中央法規出版）でまとめることができた。

(2) ケアマネジメントの効果について

客観的QOLを尺度化し、ケアマネジャーと利用者のマッチングによるパネル調査を3度（3年間）実施してきたが、そこから身体・心理・社会面で構成される客観的QOL尺度化を試みている。これについて、ほぼ調査結果が得られたため、詳細な分析を実施していく段階にある。これについては、老人保険事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）「介護支援専門員の資質向上とケアマネジメントのあり方に関する調査・研究事業」でもって進めている。

(3) 災害時のソーシャルワークについて

災害ソーシャルワークの枠組みを明らかにし、一般的なソーシャルワークとの共通点と類似点を明らかにし、それを教育カリキュラムに反映していく。これについては、原案的なものとして、みずほ福祉助成財団の補助を受けて『災害時ソーシャルワークの理論化に関する研究』（平成23年度社会福祉助成研究事業）、社団法人日本社会福祉士養成校協会、pp.1~137（2012）としてまとめた。同時に、現在働いているソーシャルワーカーの継続教育として位置づけ、ガイドラインなり教科書作成を行っている。

(4) 高齢者ケアマネジメントと障害者ケアマネジメントの共通点と相違性

障害者ケアマネジメントでは、時系列での利用者とケアマネジャーのマッチングでの変化を調査分析している。これは厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野））「障害者のQOL評価に基づくケアマネジメント手法開発の研究」で行っており、この研究と高齢者ケアマネジメントに関する研究を合わせて、両者の比較研究を行っている。

3. 研究業績

【単著書】

- 1) 白澤政和：『地域のネットワークづくりの方法—地域包括ケアの具体的な展開』中央法規出版、pp.1～161（2013）

【編著書】

- 1) 白澤政和：『岡村理論の継承と展開 第2巻 自発的社会福祉と地域福祉』右田紀久恵・白澤政和監修、ミネルヴァ書房、pp.1～260（2012）
- 2) 白澤政和：『岡村理論の継承と展開 第3巻 社会福祉における生活者主体論』右田紀久恵・白澤政和監修、ミネルヴァ書房、pp.1～223（2012）
- 3) 白澤政和：「第7章 岡村理論におけるケアマネジメントの位置」pp.134～148、『岡村理論の継承と展開 第4巻 ソーシャルワーク論』右田紀久恵・白澤政和監修、ミネルヴァ書房、pp.1～296（2012）
- 4) 白澤政和：第1巻第3編第1章「介護保険制度におけるケアマネジメント」pp.192～198、第2章「ケアマネジメントの基本的理念、意義等」pp.199～210、第4編第2章「介護予防短期入所生活介護」pp.179～202、第11章「特定施設入居者生活介護および介護予防特定施設入居者生活介護」pp.244～259、第2編第1章「地域包括ケアと地域包括支援センター」pp.284～301、第3編第2章「介護老人福祉施設」pp.381～409、第3巻第2編第3章第1節「社会資源の活用」pp.350～356『[六訂] 介護支援専門員基本テキスト』介護支援専門員テキスト編集委員会編、長寿社会開発センター（2012）
- 5) 白澤政和：第1章～第6章、pp.1～70、白澤政和・蛭江紀雄編著『改訂 ケアマネジメント—在宅・施設のケアプランの考え方・つくり方』全国社会福祉協議会（2013）
- 6) 白澤政和：第1章「人間に対する価値観」pp.2～21、第7章「尊厳を維持した介護事例」pp.142～144、pp.152～154、pp.167～169、白澤政和編『人間の尊厳と自立 第2版』ミネルヴァ書房（2013）

【編著内論文】

- 1) 白澤政和：「福祉用具サービス計画の意義」『事例で理解する「福祉用具サービス計画」の書き方と記入例 Vol.3』全国福祉用具専門相談員協会企画・監修、社会保険研究所、pp.73（2012）

【論文】

- 1) 上田正太・白澤政和他：「特別養護老人ホームの生活相談員がソーシャルワーク実践の構造に関する検討」『ソーシャルワーク学会誌』第24号、pp.15～28 (2012)
- 2) 金原京子・岡田進一・白澤政和：「介護老人福祉施設の介護職が感じる看護職との連携における「役割ストレス」の構造」『介護福祉学』vol.19-1、pp.42～50 (2012)
- 3) 上田正太・白澤政和他：「特別養護老人ホームの生活相談員におけるケアワークの仮説的実践構造の検討」『介護福祉学』vol.19-1、pp.51～61 (2012)
- 4) 兪秀娟・白澤政和他：「主任介護支援専門員が認識する「ケアマネジメントで最も時間を要する事例」の特徴 ―サービス利用者と家族の特徴に焦点を当てて―」『介護福祉学』vol.19-1、pp.71～80 (2012)
- 5) 綾部貴子・岡田進一・白澤政和「介護支援専門員による居宅サービス計画作成の達成感に関連する要因」『日本在宅ケア学会誌』Vol.16-1、pp.28～35 (2012)
- 6) 白澤政和：「地域ケア会議の進め方と関係機関とのネットワークのつくり方～地域課題の把握と課題解決につなげる方法とは～」ネットワーク110号、pp.3～12、全国地域包括・在宅介護支援センター協議会 (2012)

【その他論文】

- 1) 白澤政和：「社会福祉士制度を活かすために」『月刊福祉』第95巻第8号、全国社会福祉協議会、pp.39～43 (2012)

【報告書】

- 1) 白澤政和他：『災害時ソーシャルワークの理論化に関する研究』（公益財団法人みずほ福祉助成財団 平成23年度社会福祉助成研究事業）、社団法人日本社会福祉士養成校協会、pp.1～137 (2012)
- 2) 白澤政和他：「ソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究（第三報）」『平成24年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書』桜美林大学大学院老年学研究科pp.1～150 (2013)
- 3) 白澤政和他：『平成24年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野）研究調査報告書 障害者のQOL評価に基づくケアマネジメント手法開発の研究』桜美林大学大学院老年学研究科pp.1～80 (2013)
- 4) 白澤政和他：『平成24年度厚生労働省補助事業「老人保健健康増進等事業」報告書 介護支援専門員の資質向上と今後のあり方に関する調査研究』桜美林大学大学院老年学研究科pp.1～188 (2013)
- 5) 白澤政和他：『認知症の人へのケアマネジメントのあり方報告書』ケアマネジメントQOL研究会 (2013)

- 6) 白澤政和他：『平成24年度厚生労働省補助事業「老人保健事業推進費等補助事業」報告書 福祉用具サービス計画導入による福祉用具サービスの質の向上に関する調査研究』一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会（2013）
- 7) 白澤政和他：『平成24年度厚生労働省補助事業「老人保健事業推進費等補助事業」研修ポイント制度による福祉用具専門相談員の職業能力開発と福祉用具サービスの質の向上に関する調査研究』一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会（2013）
- 8) 白澤政和他：『平成24年度厚生労働省補助事業「老人保健事業推進費等補助事業」 有料老人ホームの契約等に関する調査研究』社団法人 全国有料老人ホーム協会（2013）
- 9) 白澤政和他：『平成24年度厚生労働省補助事業「老人保健事業推進費等補助事業」介護支援専門員のスーパービジョン実践としての実習型研修の普及に向けての調査研究』報告書』一般社団法人 日本ケアマネジメント学会（2013）

【学会発表】

- 1) 石田博嗣・白澤政和他：「介護老人福祉施設における生活相談員の専任者と他職種兼務者による業務時間の比較検証—1分間タイムスタディ調査による量的評価から—」『老年社会科学第54回大会報告要旨号』2012. 6. 9～10、日本老年社会科学会、pp.278（2012）
- 2) Shirasawa Masakazu, Shibuya Satoshi, Tojo Mitsumasa, Komori Atsushi: “Extent to which the degree of understanding regarding social work and awareness regarding social work possessed by High School career guidance” Joint World Conference on Social Work and Social Development, Stockholm, Sweden, 2012. 7. 8～12, pp.431（2012）
- 3) Ishikawa Hisanori, Watanabe Yuichi, Shirasawa Masakazu: “Conceptions of social work by local government officials in Japan” Joint World Conference on Social Work and Social Development, Stockholm, Sweden, 2012. 7. 8～12, pp.427（2012）
- 4) Watanabe Yuichi, Ishikawa Hisanori, Shirasawa Masakazu : “Recognizing the conditions for hiring certified social workers in public settings in Japan” Joint World Conference on Social Work and Social Development, Stockholm, Sweden, 2012. 7. 8～12, pp.427～428（2012）
- 5) Hata Ryosuke, Shirasawa Masakazu, Shiotani Yuji, Ishikawa Hisanori: “Research on relationship between career guidance by high school career guidance counselors and their ‘awareness regarding social work” Joint World Conference on Social Work and Social Development, Stockholm, Sweden, 2012. 7. 8～12, pp.431～432（2012）
- 6) 吉江悟・白澤政和他：「介護支援専門員を対象とした短期実習プログラムの試行と提案」『日本ケアマネジメント学会第11回研究大会抄録集』2011. 7. 14～15、日本ケアマネジメント学会、pp.73（2012）
- 7) 岡田直人・白澤政和：「東日本大震災における介護支援専門員による利用者の安否確認の実態と課題～岩手県・宮城県調査での沿岸部と内陸部の比較をもとに～」『日本ケアマネジメント学会第11回研究大会抄録集』2011. 7. 14～15、日本ケアマネジメント学会、pp.133（2012）

- 8) 綾部貴子・白澤政和他：「居宅介護支援事業所の介護支援専門員による訪問介護や訪問看護とのチーム活動の構造」『日本ケアマネジメント学会第11回研究大会抄録集』2011. 7. 14～15、日本ケアマネジメント学会、pp.151 (2012)
- 9) 岡田直人・白澤政和他：「東日本大震災における地域包括支援センターによる利用者の安否確認の実態と課題－岩手県・宮城県の沿岸部と内陸部の比較をもとに－」『日本地域福祉学会第26回全国大会 報告要旨集』2012. 6. 9～10、pp.190 (2012)
- 10) 白澤政和他：シンポジウム「精神保健福祉学の役割を考える」『日本精神保健福祉学会第1回学術研究集会プログラム要旨集』2012. 6. 29、日本精神保健福祉学会、pp.3 (2012)
- 11) 白澤政和：「パーソナル・ソーシャル・サービスの推進とサービス・デリバリー・システムの確立に向けて－日本の高齢者福祉政策の展開過程をもとに－」『2012年中国社会学年會論文集』2012. 7、中国・銀川、pp.22～30 (2012)
- 12) 白澤政和他：シンポジウム「地域包括ケアを実現するケアマネジメントの視点を考える」『日本ケアマネジメント学会第11回研究大会抄録集』2011. 7. 14～15、日本ケアマネジメント学会、pp.34 (2012)
- 13) 白澤政和：基調講演「社会福祉士養成課程の経緯と課題」『日本社会福祉教育学会 第8回大会プログラム』2012. 8. 25～26、pp.83～89 (2012)
- 14) 白澤政和：基調講演「介護が支える生活、そして未来～介護は生活支援の主役になり得るか～」『第20回日本介護福祉学会大会 発表報告要旨集』2012. 9. 22～23、pp.2 (2012)
- 15) 綾部貴子・白澤政和他：「居宅介護事業所の介護支援専門員によるサービス提供責任者や訪問看護職とのチーム活動に関連する要因－介護支援専門員の個人特性及び所属事業所の特徴、職場環境に焦点をあてて－」『第20回日本介護福祉学会大会 発表報告要旨集』2012. 9. 22～23、pp.138 (2012)
- 16) 白澤政和他：シンポジウム「ケアにおける分断の諸相とそれへの対応」『日本社会病理学会第28回大会 プログラム・報告要旨集』2012. 9. 29～30、pp.28 (2012)
- 17) 岡田直人・白澤政和：「東日本大震災における居宅介護支援事業所と地域包括支援センターによる利用者の安否確認の実態の比較と課題－岩手県・宮城県の沿岸部と内陸部の比較をもとに－」『日本社会福祉学会第60回大会秋季大会 開催校企画資料』2012. 10. 20～21、pp.59 (2012)
- 18) M. Shirasawa, S. Yoshie, R. Hata, H. Shiraki, K. Yamada, Y. Takase, A. Yonezawa, K. Masuda :
“Evaluation by clients and case managers on changes of QOL indicators in the frail elderly during one-year case management” The gerontological society of America 65th Annual scientific meeting, 2012. 11. 14～18, pp.404 (2012)
- 19) “An Exploratory Study on Time-Consuming Work and Psychological State of Senior Care Managers in Japan” Xiujuan Yu, Masakazu Shirasawa : 39th Association for Gerontology in Higher Education Annual Meeting & Educational Leadership Conference, Florida, USA, 2013. 2. 28～3. 3, 2013

- 20) 白澤政和：「どうすれば地域包括ケアが進むか—地域包括支援センターとケアマネジャーの役割」白澤政和、『第17回日本在宅ケア学会学術集会 抄録集』2013. 3. 9～10、日本在宅ケア学会、pp.73～75 (2013)

【その他の論文】

- 1) 白澤政和：連載「白澤教授のケアマネジメント快刀乱麻」『シルバー産業新聞』第36回「居宅介護支援事業者の特定事業所加算の現状と課題」第186号、第37回「ケアプランの標準化は可能か」第187号、第38回「ケアマネジメントはどのように効果を評価するのか1」第188号、第39回「ケアマネジメントはどのように効果を評価するのか2」第189号、第40回「要支援者の委託8ケース制限の全廃と居宅介護支援事業者の方向」第190号、第41回「利用者のニーズの捉え方（1）」第191号、第42回「利用者のニーズの捉え方（2）」第192号、第43回「利用者のニーズの捉え方（3）」第193号、第44回「利用者のニーズの捉え方（4）」第194号、第45回「地域ケア会議と代表者会議の進め方①地域ケア会議の進め方」第195号（2012）、第46回「地域ケア会議と代表者会議の進め方②地域のニーズへの対応」、第47回「地域ケア会議と代表者会議の進め方③地域ケア会議の位置付けに関する問題点」（2013）
- 2) 白澤政和：連載『ふれあいの輪』、白澤政和・西留美由紀・谷口弘樹「福祉用具を活用した退院支援」165号pp.12～16、白澤政和・田村瑞穂・大島一仁「福祉用具を活用した退院支援（2）」166号pp. 13～17、白澤政和・田中律子・東森栄介「進行性疾患の人に対するADL低下予防と介護負担軽減の事例」167号pp.10～14（2012）、白澤政和・寺田勉「軽度者（要支援1・2）に対するケアプランづくり」168号pp.12～16（2013）
- 3) 白澤政和：連載「ケアのtomorrow land ～地域包括ケアとは何か～」『高齢者住宅新聞』第16回「地域包括ケアで認知症の人をいかに支えるか①—BPSDへの対応」、第17回「地域包括ケアで認知症の人をいかに支えるか②—権利擁護の必要性」第214号、第18回「介護老人福祉施設は地域包括ケアに含まれるのか」第216号、第19回「地域包括ケアでの病院の位置づけ」第217号、最終回「地域包括ケアの行方」第219号（2012）
- 4) 白澤政和：「認知症の人を支援するケアマネジメント（連載）」『Dementia Support』「がん疾病を抱えるグループホーム利用者を医療との連携で支える」2012年冬号、「職員と家族で課題を共有し、繰り返し検討・実践を重ねる」2012年夏号（2012）、「「もの忘れ」の不安がある一人暮らしの人への支援」2013年冬号（2013）
- 5) 白澤政和：シンポジウム「社会福祉がとらえる「利用者像」—東日本大震災を踏まえて—」『第12回損保ジャパン記念財団賞受賞者記念講演録』損保ジャパン記念財団、pp.33～65（2012）
- 6) 白澤政和：巻頭言「社会福祉士養成教育での残された課題—実習教育について思う—」『日本社会福祉教育学会誌』第6号、日本社会福祉教育学会、pp.1～2（2012）
- 7) 白澤政和：記念講演「地域包括ケアを実践するネットワークの構築に向けて」『第1回群馬県地域包括・在宅介護支援センター研究大会報告書』群馬県地域包括・在宅介護支援センター

協議会、pp.39～58（2012）

- 8) 白澤政和他：シンポジウム「災害とソーシャルケア」『コミュニティソーシャルワーク』9号、日本地域福祉研究所、pp.40～57（2012）
- 9) 白澤政和他：『災害時ソーシャルワークの理論化に関する研究』（公益財団法人みずほ福祉助成財団 社会福祉助成金事業）、社団法人日本社会福祉士養成校協会、pp.1～48（2012）

【科研費などの助成金】

- 1) 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究（A）「ソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究」（H22～25）（代表者）
- 2) 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野））「障害者のQOL評価に基づくケアマネジメント手法開発の研究」（H23～25）（代表者）
- 3) 老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）「介護支援専門員の資質向上とケアマネジメントのあり方に関する調査・研究事業」（H24）（代表者）

【その他の研究活動】

- 1) 老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）「研修ポイント制度による福祉用具専門相談員の職業能力開発と福祉用具サービスの質の向上に関する調査研究事業」全国福祉用具専門相談員協会（H24）（委員長）
- 2) 老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）「福祉用具サービス計画導入における福祉用具サービスの質の向上に関する調査研究事業」全国福祉用具専門相談員協会（H24）（委員会）
- 3) 老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）「地域包括支援センターや在宅介護支援センターにおける認知症の人に対する相談支援の手法に関する調査研究事業」全国社会福祉協議会（H24）（委員長）
- 4) 「地域包括支援センター・在宅介護支援センターのあり方について（提言）」全国地域包括・在宅介護支援センター協議会（委員）
- 5) 公益財団法人 みずほ福祉助成財団「災害時ソーシャルワークの理論化に関する研究」全国社会福祉士養成校協会（H24）（委員）
- 6) 老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）「契約等に関する調査委員会」全国有料老人ホーム協会（H24）（委員）
- 7) 老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）「介護支援専門員に対するスーパービジョンのあり方に関する研究」一般社団法人 日本ケアマネジメント学会（H24）（委員）

1. 研究課題

- (1) 社会連帯の形成・維持機構の解明－社会階層による健康格差の解消に向けて
- (2) 介護者における在宅サービスの利用の効果および関連要因の検討
- (3) 東日本大震災による透析患者の心的外傷後ストレス障害

2. 研究活動の概要

(1) 社会連帯の形成・維持機構の解明－社会階層による健康格差の解消に向けて

1) 文献研究

健康の社会的決定要因としての社会関係に関する概念の整理と実証研究の到達点を明らかにしたレビュー論文を雑誌に寄稿した。

健康の階層間格差の研究における社会関係指標の位置づけを整理するために文献レビューを行い、雑誌に寄稿した。その項目立ては、第1に、健康の社会的決定要因としての社会経済階層と社会関係について、研究の展開と両研究の接点を整理する。第2に、社会経済階層と社会関係の接点に位置する研究の到達点を整理する。以上を踏まえ、第3に、社会経済階層と社会関係との接点の研究を発展させるために必要な課題を提案する。

2) データ解析

社会階層の健康格差を、個人レベルと地域レベルの社会関係が緩和する効果があるか否かを、東京都下の自治体で行われた高齢者に対する調査データを利用して分析した。社会関係は個人レベル・地域レベルとも組織帰属、すなわち町内会などの地縁的組織、趣味の会などの自己完結型組織、ボランティア団体など社会貢献的な組織の3種類に区分して評価した。地域レベルの社会関係は、町目単位で分析対象者の社会関係指標の平均スコアを算出し、評価した。分析の結果、個人レベルと地域レベルの社会関係指標のいずれも社会階層による健康格差を緩和する効果があること、しかし、その効果は帰属組織の種類によって異なることが明らかとなった。

(2) 介護者における在宅サービス利用の効果および関連要因の検討

1) データ解析

介護サービスへのアクセスが介護保険制度前後でどのように変化しているのかを、①全体的なアクセスの変化とともに、②介護保険制度導入前後でサービスニーズと経済状況によるアクセスの違いが縮小あるいは拡大しているかといった視点からも分析した。分析データは、東京都下の自治体

において要介護高齢者の介護者を対象に実施された繰り返しの横断調査に基づく。実施時期は、介護保険制度導入前後の1996年、1998年、2002年、2004年、2010年で、実施回数は5回であった。介護サービスは利用要因が異なるため、種類別（ショートステイ、デイサービス、ホームヘルプ）に分析した。サービスのニーズ要因には、高齢者の日常生活動作、問題行動数、介護者の介護負担感、私的な副介護者の有無、経済状況は主観的な経済困難感で測定した。分析の結果、以下の点が明らかとなった。①ニーズ要因の影響を調整しても、いずれのサービスにおいても、1996年と比較すると、介護保険導入前の1998年からアクセスが改善しつつあり、介護保険導入後の2002年以降では大きな変化はない。②ニーズや私的支援、経済状況によるアクセスの違いが介護保険導入前後で拡大・縮小しているか否かについては、ホームヘルプについては、副介護者の有無と調査年の交互作用が有意であり、介護保険制度導入後に副介護者の有無によるアクセスの差が縮小し、2010年ではほとんど差がない。デイサービスについては、介護者の負担感と調査年の交互作用が有意であり、介護保険制度導入後に介護負担感が高い人で特にアクセスが良好である。

(3) 東日本大震災による透析患者の心的外傷後ストレス障害

透析患者は、透析に至る基礎的な疾患をもち、定期的に透析を受けなければならない。そのため、東日本大震災の影響が一般の人よりも深刻に、かつ広範囲にみられている可能性がある。しかし、透析患者を対象とした震災の影響に関する調査はほとんどない。加えて、今後起こるであろう震災に備え、様々な準備をしておくことが透析患者に対する震災の影響を最小限に抑えるために必要である。以上の問題関心から、岩手、宮城、福島県の3県に居住する全国腎臓病協議会の会員全数を対象に、自記式調査票を用いた郵送調査を実施する。調査は3月中に行なう予定である。

3. 研究業績

【論文】

- 1) ト部吉文, 杉澤秀博. 2013. 「訪問リハビリテーションにおける長期継続利用に至るプロセス」『日本在宅ケア学会誌』16 (2) : 45-52.
- 2) 杉原陽子, 杉澤秀博, 中谷陽明. 2012. 「介護保険制度の導入・改定前後における居宅サービス利用と介護負担感の変化 : 反復横断調査に基づく経年変化の把握」『厚生指標』59 (15) : 1-9.
- 3) 柴田博, 杉原陽子, 杉澤秀博. 2012. 「中高年日本人における社会貢献活動の規定要因と心身のウェルビーイングに与える影響 : 2つの代表性のあるパネルの縦断的分析」『応用老年学』6 (1) : 21-38.
- 4) 杉澤秀博, 石川久展, 杉原陽子. 2012. 「民生委員を通じた閉じこもり高齢者把握の可能性」『日本公衆衛生雑誌』59 (5) : 325-332.
- 5) 杉澤秀博. 2012. 「健康の社会的決定要因としての社会関係 : 概念と研究の到達点の整理 (特集 社会的サポート・ネットワークと社会保障)」『季刊社会保障研究』48 (3) : 252-265.

- 6) 吉澤恵美, 杉澤秀博. 2012. 「家族介護者の認知症に関する理解度が介護負担感に与える効果」『老年学雑誌』2: 43-56.

【学会発表】 (筆頭著者のみ)

- 1) 杉澤秀博, 原田謙, 杉原陽子, 新名正弥, 柳沢志津子, 高齢者における個人レベルのソーシャル・キャピタルの健康度自己評価への効果, 日本老年社会学会第54回大会, 佐久, 2012. 6.9-10.
- 2) H. Sugisawa, K. Harada, M. Shinmei, Y. Sugihara, S. Yanagisawa, Effects of individual-level social capital on health of elderly people, 45th National Conference of the Australian Association of Gerontology, Brisbane, 20-23 November 2012.
- 3) H. Sugisawa, Y. Sugihara, Y. Nakatani, M. Shinmei, H. Kodama, Y. Watanabe, Access Disparities in In-Home Care Service Usage after Introducing Long-Term Care Insurance in Japan, 65th Annual Scientific Meeting of the Gerontological Society of America, San Diego, 11-18 November, 2012.

【科研費などの助成金】

- 1) 社会連帯の形成・維持機構の解明 (研究代表)
- 2) 東日本大震災による血液透析患者のPTSDの調査研究 (研究代表)

1. 研究課題

- (1) 在宅要介護高齢者における立位負荷に対する身体反応
- (2) 朝のラジオ体操による血圧の変動とその関連要因
- (3) 都市部在宅高齢者における食品摂取の多様性の関連要因
- (4) 国民健康保険の保険者機能評価に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 在宅要介護高齢者における立位負荷試験に対する身体反応

目的は、在宅要介護高齢者における立位負荷時の自律神経機能をはじめとした身体反応を明らかにすることである。対象は、A事業所の訪問サービスを利用する要介護高齢者のうち研究の同意を得た、生活自立9名（男性7名、女性2名、平均年齢 77.3 ± 9.1 歳）、準寝たきり11名（男性3名、女性8名、平均年齢 81.3 ± 6.0 歳）、寝たきり7名（男性3名、女性4名、平均年齢 78.0 ± 11.6 歳）である。対象に立位負荷を行い、安静時、立位直後、3分後、5分後の最大血圧（SBP）、最小血圧（DBP）、心拍数（HR）、経皮的血中酸素飽和度（SpO₂）の測定値の経時変化を寝たきり度別に比較した。SBPは立位直後に平均9.3mmHg低下した後速やかに回復した。SBPの経時変化には寝たきり度による差はなかった。DBPは立位後漸増傾向を示したが有意な変化ではなかった。HRは立位直後に平均8.8/分増加し、5分後も平均5.4/分増加した状態が持続していた。また、寝たきり群では立位直後のHRの増加が平均13.7/分と大きかった。SpO₂は寝たきり群においてのみ立位直後に0.57%低下したが、その低下は有意ではなかった。要介護者に立位を負荷した際の血圧変化は安全な範囲内であり、SpO₂の変化も小さかったが、寝たきり群では心拍数の増加が他の群より大きく、心臓への負担は比較的大きいものと考えられた。

(2) 朝のラジオ体操による高齢者の血圧変動とその関連要因

目的は、朝のラジオ体操を継続している高齢者の体操前後の血圧変動およびその関連する要因を明らかにすることである。ラジオ体操会会員から募集した男性44名（平均74.0歳）、女性40名（平均70.2歳）に対し、朝のラジオ体操実施前、体操直後の安静座位の最大血圧（SBP）、最小血圧（DBP）、脈拍（PR）を自動血圧計にて測定した。また、属性、病歴、服薬状況の聞き取りおよび、身長、体重、握力等の体力測定を行った。性、年齢区分、降圧剤服用の有無別に、血圧、脈圧、脈拍、ダブルプロダクトについて、対応のあるt検定により体操前後の比較を行った。体操前SBP140mmHg以上は73.8%と多かった。体操前後の差では、性別では女性のPRのみ

有意に増加した。ダブルプロダクトは増加傾向を示したが、差は有意ではなかった。降圧剤服用別では、服用無群のPRのみ有意に増加した(69.3→72.8/分)。SBP変化には年齢と降圧剤服用の交互作用があり、75歳以上の降圧剤服用群ではSBPが有意に低下した(156.5→144.5mmHg)。高齢者にとり体操の運動負荷は小さいものと考えられたが、高血圧を示す者が多いため体操前には血圧測定を行うべきである。また、降圧剤服用者では体操後のSBP低下に特に留意する必要がある。

(3) 都市部在宅高齢者における食品摂取の多様性の関連要因

目的は、都市部在宅高齢者における食品摂取の多様性の関連要因を明らかにすることである。都内K地域の65～70歳の住民から無作為抽出した1,000名に対し郵送調査を実施し、属性、世帯構成、体格、体格自己評価、保健行動、食品群別食品摂取頻度、飲酒・喫煙状況、運動頻度などの生活習慣を把握した。65～70歳の男性195名、女性215名から回答を得た。食品摂取の多様性得点は、肉、魚、卵、大豆・大豆製品、牛乳、緑黄色野菜、海藻類、いも類、果物類、油脂類の10品目について、「ほぼ毎日食べる」を1点、それ未満を0点として合計し算出した。食品摂取の多様性得点を有意に上げていた要因は、性別では女性、世帯形態では同居者がいること、よく噛めること、毎日運動習慣があること、食に関する正しい知識を有していることなどであった。

(4) 国民健康保険の保険者機能評価に関する研究

国民健康保険の保険者機能を評価し、その関連要因を明らかにすることを目的とした。市町村国民健康保険の全保険者に郵送調査を実施し、保険者が考える保険者機能、各事業の実施状況等を把握した。645件(37.4%)の回答を得た。保険者が考える保険者機能は、給付適正化(84.5%)と保険料徴収(77.5%)が多く、保健サービス提供、効率性、情報分析、情報提供、公平性、有効性をあげた保険者は5割未満であった。保険料徴収機能と各種保健サービス提供機能は正の関連を示した。事業計画策定過程への被保険者の参画、苦情対応の第三者機関設置、事業計画に対するパブリックコメントの把握、悪質な業者を排除する取組みなど、被保険者の権限の拡大に関わる機能は不十分であった。また、保険者機能の自己評価はほとんど行われておらず第三者評価が必要と考えられた。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 渡辺修一郎：Ⅰ章13「疾病に対する反応と健康」、Ⅱ章2「心臓血管系疾患」。森和代、石川利江、茂木俊彦編：よくわかる健康心理学。ミネルヴァ書房、東京、2012年8月。

【論文】

- 1) 齋藤崇志、平野康之、大森祐三子、大森豊、渡辺修一郎：訪問リハビリテーションにおける多職種連携の取り組み 客観的評価に基づく情報提供が有効であった一症例を通して。理学療法：技術と研究、40：59-64、2012

- 2) 田中千晶, 藤原佳典, 安永正史, 桜井良太, 斎藤京子, 金憲経, 深谷太郎, 野中久美子, 小林和哉, 吉田裕人, 内田勇人, 新開省二, 渡辺修一郎: 複合健康増進プログラムが地域在住高齢者の日常的な身体活動量へ与える影響: 無作為化比較試験による検討. 日本老年医学会雑誌, 49 (3) : 372-374, 2012
- 3) 桜井良太, 藤原佳典, 深谷太郎, 斎藤京子, 安永正史, 鈴木宏幸, 野中久美子, 金憲経, 金美芝, 田中千晶, 西川武志, 内田勇人, 新開省二, 渡辺修一郎: 運動に対する充足感が高齢者および高齢者の運動介入効果に与える影響 運動充足感と身体活動量からの検討. 日本公衆衛生雑誌, 59 (10) , 2012
- 4) Sakurai R, Fujiwara Y, Saito K, Fukaya T, Kim MJ, Yasunaga M, Kim H, Ogawa K, Tanaka C, Tsunoda N, Muraki E, Suzuki K, Shinkai S, Watanabe S.: Effects of a comprehensive intervention program, including hot bathing, on overweight adults: A randomized controlled trial. Geriatrics and Gerontology International. Oct 24. doi : 10. 1111/j. 1447-0594. 2012. 00955. x., 2012
- 5) 渡辺修一郎: 巻頭言 2012年問題と応用老年学. 応用老年学, 6 : 3, 2012
- 6) 畠山浩太郎, 柴喜崇, 植田拓也, 渡辺修一郎: 地域在住中高年者における運動実施頻度減少群に見られる特徴—身体機能・IADL・QOLに着目して—. 応用老年学, 6 : 79-84, 2012

【学会発表】

- 1) 植田拓也, 柴喜崇, 戸崎麻紀子, 渡辺修一郎: 地域在住中高年者における自主参加型体操グループへの参加中止に関連する要因. 第47回日本理学療法学会大会. 2012年5月26日.
- 2) 水本淳, 古名丈人, 井平光, 村瀬裕志, 大國美佳, 安田圭佑, 佐藤眞一, 権藤恭之, 渡辺修一郎: 運動習慣の有無に影響を与える生活習慣要因の検討 — 中年者と高齢者との比較および相違—. 第47回日本理学療法学会大会. 2012年5月27日.
- 3) 渡辺修一郎, 植田拓也, 柴喜崇, 畠山浩太郎: 朝のラジオ体操による血圧の変動とその関連要因. 第54回日本老年医学会学会集會. 2012年6月28日.
- 4) 桜井良太, 藤原佳典, 深谷太郎, 渡邊麗子, 安永正史, 村山陽, 吉田裕人, 新開省二, 渡辺修一郎: 高齢者の足部の問題と転倒の関連性—パス解析モデルによる検討. 第54回日本老年医学会学会集會. 2012年6月28日.
- 5) 藤原佳典, 野中久美子, 小池高史, 渡邊麗子, 深谷太郎, 松本真澄, 田中千晶, 植木章三, 細井孝之, 渡辺修一郎: 自立支援機器を用いた地域包括的システムの開発 (1) 研究デザインとプロセス. 第54回日本老年医学会学会集會. 2012年6月28日.
- 6) 野中久美子, 小池高史, 渡邊麗子, 深谷太郎, 渡辺修一郎, 松本真澄, 田中千晶, 植木章三, 細井孝之, 藤原佳典: 自立支援機器を用いた地域包括的システムの開発 (2) 地域ケア機関が抱える課題. 第54回日本老年医学会学会集會. 2012年6月28日.
- 7) 渡邊麗子, 野中久美子, 小池高史, 深谷太郎, 渡辺修一郎, 松本真澄, 田中千晶, 植木章三, 細井孝之, 藤原佳典: 自立支援機器を用いた地域包括的システムの開発 (3) 自立支援機

- 器の設置可否に影響する要因. 第54回日本老年医学会学術集会. 2012年6月28日.
- 8) 野藤悠, 藤原佳典, 新開省二, 渡辺修一郎, 鈴木隆雄, 柴田博: 地域在住高齢者の体力と抑うつ症状に関する前向き研究. 第54回日本老年医学会学術集会. 2012年6月30日.
- 9) 渡辺修一郎: 国民健康保険の保険者機能評価に関する研究. 第71回日本公衆衛生学会総会. 2012年10月25日.
- 10) 松本直人, 新野直明, 長田久雄, 渡辺修一郎: 地域在住高齢喘息患者における休息姿勢の主観的有効性. 第71回日本公衆衛生学会総会. 2012年10月26日.

【科研費などの助成金】

- 1) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)): 医療保険および介護保険の保険者機能評価に関する研究(代表研究者).
- 2) 日本学術振興会科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究): 台湾離島に來襲した大津波の検証と低レベル放射線の生態系への影響(分担研究者).
- 3) 平成24年度 老人保健事業推進費等補助金(老人保健健康増進等事業): 地域包括ケアを支える医療機関と保険者機能連携に関する調査研究事業(分担研究者).
- 4) 厚生労働科学研究費補助金(H23-認知症-一般-001): 認知機能低下高齢者への自立支援機器を用いた地域包括的システムの開発と評価(分担研究者).

【その他の研究活動】

- 1) 国土交通省の「健康・医療・福祉まちづくり研究会」委員, および, 「健康・医療・福祉政策及びコミュニティ活動と連携したまちづくり検討調査」委員として, 健康・医療・福祉のまちづくりに関する研究に従事.
- 2) 世田谷区の健康きたざわプラン推進委員として健康きたざわプランの評価に関する研究に従事.
- 3) 東京都健康長寿医療センター研究所, 社会参加と地域保健研究チーム協力研究員として, 社会参加と地域保健に関する研究に従事.
- 4) 志木市介護保険事業計画策定委員会委員として志木市介護保険事業計画に関する調査研究に従事.

1. 研究課題

- (1) 高齢者と家族に関する研究
- (2) 一人暮らし高齢者とその支援に関する研究
- (3) 教育とその効果に関する研究【ジェンダー的視点から】

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者と家族に関する研究

このテーマは長年にわたって研究の柱に据えており、高齢化に伴う世帯構成の変化や都市化による家族関係の変化を追いながら、親族ネットワークや福祉施策からの支援との関連を調査してきた。とくに高齢者が戦後生まれ世代へと入れ替わっていく現在にあって、これまでの高齢者で得られた知見が新しいコホートにもあてはまるのか、ということを中心に調査を行った。これは東京都老人医療センター研究所【旧：東京都老人総合研究所】とミシガン大学が共同で行い、近年は東京大学も参加・主導しているパネル研究で、1989年に第1回目の調査を行い、2012年は8回目のパネル調査と新規コホートの追加調査を行った(3. 助成金の3)、参照)。ようやくデータ・クリーニングが終わり、これから分担して分析にとりかかるところである。また、高齢者と家族についての研究そのなかで近年は一人暮らし世帯の増加に特に注目しており、一人暮らし高齢者の特徴の把握、一人暮らし世帯の関連要因などをあきらかにしようと考えている。

(2) 一人暮らし高齢者とその支援に関する研究

科学技術振興機構(JST)が「コミュニティで創る新しい高齢社会デザイン」という、高齢社会の具体的課題の解決を目指すために、多様な関与者(研究者、自治体、企業など)の協同を促す実践的研究プログラムを公募したが、それに18人の関与者の一人として応募し、2010年後半に採択された(代表者:小川晃子岩手県立大学教授 3. 助成金の1)参照)。プロジェクト名は「ICTを活用した高齢者生活支援型コミュニティづくり」であり、直井はその中で「高齢者生活自立支援策グループ」のグループリーダーを務めている。これは過疎化している岩手県の中で4地域を選んで、一人暮らし高齢者の異変をICT(情報通信技術)を使って察知し、かつそれを生活支援にもつなげていくこと、このような介入の前後での高齢者と地域社会の変化を把握しようという研究である。2011年度には電話機を利用した「おげんき発信」という仕組みのモニターを4地域で依頼し、また高齢者について事前調査を実施した。そのうちの1地域で、モニターが地域全体の独り暮らし高齢者と比較してどういふ人々なのかを知るために、一人暮らし高齢者全体の郵送調査を実施することができた。10年度

終わりは1月の雪害や3月の東日本大震災があり、事前調査には遅れもあったが、2011年度にはモニターを200名近く依頼し、1地域ではお元気発信の2度目の調査を行った。また民生委員の調査も行い、震災時の対応や、お元気発信をどう感じているのかなどを調査した。これらについては一次の集計結果がまとまり、最初はお元気発信は負担が増えるのではと懸念していた民生委員の多くが、むしろ楽になったと報告していることがわかった。12年度中に「介入後」の調査を行うと同時に、1地域においては関与者を招いてグループインタビューを行い、地域でしだいに支援が活性化していく過程をとらえることができた。アクションリサーチの好例となりそうである。東日本大震災で半年の延長が認められたため、あと半年で体系的な報告をめざす。

(3) 教育とその効果に関する研究

長年、教員養成系大学に在籍したところから、学校教育とジェンダーに関する研究にグループでとりくんできた。ある時期には代表者として小学校、中学校の児童・生徒と教員の調査を行ってきたため、引き続き、高校を対象とした調査に一員として参加している。10年度は科学研究費の初年度で、調査の枠組みについての議論やいくつかの高校のインタビューなどを行い、2011年末には調査票を策定した。2012年2月から3月にかけていくつかの高校で調査を実施し、秋にはデータファイルが完成した。直井は「高校卒業後の進路希望」についてジェンダー・高校タイプ別の分析を行なってすでに簡単な報告を提出し、12年度終わりには報告書が発行される。

3. 研究業績

【著書】【分担執筆】

- 1) 『老年心理学〔改訂版〕』（下仲順子編）第10章 老年期の家族 122-133頁 培風館 2012
- 2) 『揺らぐ男性のジェンダー意識 仕事・家族・介護』（目黒依子・矢澤澄子・岡本英雄編）第7章 男性のジェンダーと介護意識 114-131頁 新曜社 2012

【科研費などの助成金】

- 1) 科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）「コミュニティで創る新しい高齢社会デザイン」委託研究「ICTを活用した高齢者生活支援型コミュニティづくり」（代表：小川晃子岩手県立大学教授）（直井の役割：グループリーダー）
- 2) 科学研究費補助金「高校生男女の達成意欲における分極化と教師の支援のあり方に関する研究」（代表：大竹みどり東京学芸大学教授・副学長）（直井の役割：協力研究者）
- 3) 科学研究費補助金「高齢者の健康・心理・社会的側面の横断的・縦断的变化におけるコホート差の研究」（代表：秋山弘子東京大学高齢総合研究機構教授）（直井の役割：連携研究者）

【その他の研究活動】

1) 日本学術会議連携会員

9月より始まる第22期の日本学術会議連携会員に選出された。社会変動と若者分科会、社会福祉分科会 高齢者の健康分科会 東日本大震災の被害構造と日本社会の再建の道を探る分科会の四つの分科会に所属し、活動している。

2) 学会活動

日本社会学会理事11月まで（財務委員会副委員長）

日本老年社会科学会評議員

日本家族社会学会理事（学会誌編集委員会委員）

日本社会学系コンソーシアム評議員

3) 研究活動

老人医療センター研究所 協力研究員

4) 社会的活動

老人医療センター研究所倫理委員会委員

エイジング総合研究センター評議員

社会福祉法人（老人ホーム、デイサービスなど経営）真寿会理事・評議員

興亜福祉財団評議員

家計経済研究所 研究費助成審査委員会委員長

1. 研究課題

高齢ボランティアリーダーによる自主活動を通じた新たな介護予防運動プログラムの提案とその普及と効果に関する研究

2. 研究活動の概要

1) 全体の概要

本研究は、我々が従来から養成してきた高齢ボランティアリーダーを介して、地域特性を考慮した運動プログラム等を普及し、その介護予防に資する効果を検証しようとするものである。

2) 本年度の概要

高齢化が深刻な中山間地域の介護予防事業は、地域のコミュニティ存続の命綱といえる。しかし、こうした地域は人的・社会的資源は限られ、既存の施設や人材を有効に活用し地域の特性に即したプログラムの提案が必要になると考えられる。本研究では、中山間地の特性を生かし、農地や森林での活動を視野に入れた高齢者の自主的運動プログラムの提案を試み、本年度は2年目となる。

本研究のモデル地域は宮城県登米市の3支所である。市が養成している高齢者ボランティアリーダーが接する機会が想定される65歳以上地域住民を選定し、高齢者ボランティアリーダーを介した活動プログラムの効果を比較分析するためのベースライン調査対象者とした。選定された1,012人に対し、平成22年11月～平成23年1月に訪問面接によるベースライン調査を実施し926人から回答を得た。また、平成23年10月～12月に同対象者にフォローアップ調査を実施したが、追跡可能だった対象者は885人であり、本年度はその対象者に2回目のフォローアップ調査を実施した。

3支所のうち、2支所を農地での活動用運動プログラム提案地区（A地区）と森林での活動用運動プログラム提案地区（F地区）とし、プログラムの試案を作成した後、月1回開催する高齢ボランティアリーダー研修会で実技指導を行い、自宅ならびに地区での自主活動で実践を促した。その中で、実施上の困難度等の意見を聴取しながら、地区の自主活動で普及をはかるための自主運動プログラムを作成した。残り1地区（C地区）は従来の高齢ボランティアリーダー研修会（年3回）のみを開催した。

ベースライン調査結果から、A地区が、他の2地区に比べ年齢が高く、C地区は他の2地区に比べ男性の割合が高いという傾向はあるものの、概ね社会参加や健康度、生活機能ならびに生活体力等には有意差はみられなかった。フォローアップ調査結果から1年間の変化を分析した結果、各地区とも対象者の生活機能や生活体力などは同様に低下する傾向がみられたが、追跡期間と地区による交互作用

用に有意差はみられなかった。本年度も提案した運動プログラムの普及をはかりその経過等を観察した。

3. 研究業績

【論文】

- 1) Masayuki Hoshi, Atsushi Hozawa, Shinichi Kuriyama, Naoki Nakaya, Kaori Ohmori-Matsuda, Toshimasa Sone, Masako kakizaki, Kaijin Niu, Kazuki Fujita, Shouzoh Ueki, Hiroshi Haga, Ryoichi Nagatomi and Ichiro Tsuji: The predictive power of physical function assessed by questionnaire and physical performance measures for subsequent disability. Aging Clinical and Experimental Research24 (4) : 345-353, 2012. (査読有)
- 2) 植木章三: 運動をつくり, 広める, 地域高齢者の運動のあり方. 老年社会科学34 (1) : 64-70, 2012. (査読無)
- 3) 鈴木誠, 佐藤洋一郎, 武田涼子, 植木章三, 高戸仁郎, 犬塚剛, 本田春彦, 藤澤宏彦: 足関節筋力の動特性と歩行及びバランス能力との関係—若年女性及び高齢女性との比較—. 東北理学療法学24 : 48-53, 2012. (査読有)

【学会発表】

- 1) 植木章三: 介護予防に資する“普通の高齢者”が求める“運動”とは? 体力科学62 (1) : 44, 2012.
- 2) 鈴木宏哉, 岡崎勘造, 坂本譲, 植木章三: 沿岸部被災地域の子どもの身体活動量と健康関連QOLの経時変化: Onagawa Growth and Health Longitudinal Study. 体力科学61 (6) : 697, 2012.
- 3) 坂本譲, 鈴木宏哉, 岡崎勘造, 植木章三: 沿岸部被災地域の中学生の唾液中免疫ストレス指標の状況と身体活動量, 健康関連QOLの影響: Onagawa Growth and Health Longitudinal Study. 体力科学61 (6) : 697, 2012.
- 4) 安齋紗保理, 芳賀博, 植木章三: 地域在住高齢者の骨関節系の痛みが身体・社会的側面に及ぼす影響: 痛みの出現部位に着目して. 第7回日本応用老年学会年次総会報告要旨: 21, 2012.
- 5) 本田春彦, 植木章三, 河西敏幸, 高戸仁郎, 犬塚剛, 入江由香子, 荒山直子, 芳賀博: 地域在住高齢者における包括的抑うつ予防プログラムの実践と評価 (第一報).
- 6) 吉田裕人, 入江由香子, 植木章三, 高戸仁郎, 犬塚剛, 荒山直子, 本田春彦, 芳賀博: 基本チェックリストの二次予防事業対象者選定項目群が将来の医療費に及ぼすインパクト. 日本公衆衛生雑誌59 (10) : 377, 2012.
- 7) 犬塚剛, 片倉成子, 須藤庸子, 鈴木道子, 辻雅子, 植木章三: 地域在住高齢者における栄養改善を目的とした介入頻度の異なるプログラム効果の検証. 日本公衆衛生雑誌59 (10) : 373, 2012.

- 8) 石原美由紀, 柵木聖也, 星野千恵子, 清水小百合, 藤山友紀, 加藤円子, 植木章三: 介護予防二次予防事業における包括的な複合プログラムの継続効果の検証 (中間報告). 日本公衆衛生雑誌59 (10) : 370, 2012.
- 9) 植木章三, 高戸仁郎, 犬塚剛, 入江由香子, 荒山直子, 本田春彦, 吉田裕人, 芳賀博: 農地や森林での活動を視野に入れた高齢者自主運動プログラムの提案. 日本公衆衛生雑誌59 (10) : 359, 2012.
- 10) 高戸仁郎, 植木章三, 犬塚剛, 入江由香子, 荒山直子, 本田春彦, 吉田裕人, 芳賀博: 地域在住高齢者の運動における行動変容ステージと健康体力関連要因. 日本公衆衛生雑誌59 (10) : 357, 2012.
- 11) 坂本讓, 鈴木宏哉, 岡崎勘造, 植木章三: 沿岸部被災地域の児童生徒の免疫ストレス指標と身体活動量, 健康関連QOLとの関連性. 日本公衆衛生雑誌59 (10) : 311, 2012.
- 12) 渡邊麗子, 野中久美子, 小池高史, 深谷太郎, 渡辺修一郎, 松本真澄, 田中千晶, 植木章三, 細井孝之, 藤原佳典: 自立支援機器を用いた地域包括的システムの開発— (3) 自立支援機器の設置可否に影響する要因. 日本老年医学会雑誌49 (supplement) : 126, 2012.
- 13) 野中久美子, 小池高史, 渡邊麗子, 深谷太郎, 渡辺修一郎, 松本真澄, 田中千晶, 植木章三, 細井孝之, 藤原佳典: 自立支援機器を用いた地域包括的システムの開発— (2) 地域ケア機関が抱える課題. 日本老年医学会雑誌49 (supplement) : 126, 2012.
- 14) 藤原佳典, 野中久美子, 小池高史, 渡邊麗子, 深谷太郎, 松本真澄, 田中千晶, 植木章三, 細井孝之, 渡辺修一郎: 自立支援機器を用いた地域包括的システムの開発— (1) 研究デザインとプロセス: 日本老年医学会雑誌49 (supplement) : 125-126, 2012.

【その他】

- 1) 植木章三: 地揺れて、絆強まる～アダプテッド・スポーツが絆をサポートする～東日本大震災を経験して. 障害者スポーツ科学10 (1) : 5-9, 2012.
- 2) 植木章三: 未曾有の出来事から思うアダプテッド・スポーツ科学のあり方. 障害者スポーツ科学10 (1) : 1, 2012.

【科研費などの助成金】

- 1) 日本学術振興会: 科学研究費補助金 (基盤研究B) (研究代表者: 植木章三)
- 2) 厚生労働省: 認知症対策総合研究事業 (分担研究者: 植木章三)

1. 研究課題

- (1) 配偶者との死別に関する縦断研究
- (2) 虚弱高齢者を対象としたライフストーリーブック作成に関する介入研究

2. 研究活動の概要

(1) 配偶者との死別に関する縦断研究

配偶者との死別の悲嘆を克服するには2つの課題に対処する必要がある。一つは配偶者への愛着とその途絶に関する課題であり、もう一つは死別によって変わってしまった世界に適応するという課題である。フロイト(1917)は、悲嘆から立ち直るためには「悲哀の仕事」をする必要があり、それによって愛着対象からリビドーを解放すると考えたが、これに対してNeimeyer, R. A. (1998)は、意味の再構成が悲嘆の中心のプロセスであるとし、一貫した人生物語として喪失体験を再編することの重要性を指摘した。そして自分のライフストーリーを語ることが混沌とした一連の出来事に秩序をつける手段となるとした。

本研究は、配偶者の喪失によって変わってしまった想定世界を「伴侶と歩んだ人生アルバム」を作成するプログラムに取り組むことによって「意味の再構成」が行われ、精神的健康の回復や人間的成長等の発達の機能が促進されるかどうかについて検討した。

2000年に開始した配偶者と死別した高齢者の縦断調査の第4回調査時に「伴侶と歩んだ人生アルバム」をつくるプログラムへの参加を募り、これに応じた6名(男性5名、女性1名)を対象に介入プログラムを実施した。また、配偶者と死別した自助グループに介入プログラムの参加を呼びかけ、応募した8人(男性5名、女性3名)に対しても介入プログラムを実施し、2群併せた上で分析を行った。

介入プログラムは、週に一度、連続して5回面接し、配偶者との出会いから死別、そして現在までを語ってもらい、面接の前後に効果評定を行った。測定項目は、成長感尺度、エリクソン心理社会的段階目録検査(自我統合のみ)を使用した。

介入プログラムの効果測定は、プログラムの実施前後に行った評価尺度の得点差を見た。エリクソン心理社会的段階目録検査では介入プログラムの効果は明らかではなかったが、成長感尺度では介入後に得点の増加を示した者が圧倒的に多かった。

配偶者と出会ってから死別するまでの人生を語る介入プログラムは、配偶者との死別によって変わってしまった世界の意味構造を再構成する機会となったかもしれない。このような作業の過程で喪失の意味を捉え直したことが人間的成長を促すことに繋がったと考えられる。

(2) 虚弱高齢者を対象としたライフストーリーブック作成に関する介入研究

後期高齢期や超高齢期には身体機能の低下が避けられず、加えて様々な慢性疾患に罹りやすくなるために、介助を受けながら生活するようになる者も多い。健康を損ね、虚弱となった高齢者は限られた空間の中で生活を余儀なくされるために、社会や人々との活発な交流も乏しくなりがちで、人生の最後の時まで心理的QOLを低下させずに充実して過ごすことは難しいと思われる。寝たきりや準寝たきりの高齢者に対して心理的QOLの維持、向上を目指した心理的支援を行うことが望まれる。

本研究ではライフレビューとライフストーリーブック作成プログラムを虚弱が進行している高齢者に実施し、心理的QOLに及ぼす効果を検証した。この研究の参加者は特別養護老人ホーム利用者22名（年齢範囲：71～95歳）で、10名は介入群、12名は対照群とした。介入群は、週に1度、連続して6回ライフレビューを実施し、後にライフストーリーブックを作成した。プログラムの介入効果を調べるために心理的QOLに関する指標として精神的健康、ネガティブ気分、自尊感情、統合性を測定した。群と評価時点を2要因とする反復測定分散分析を行い、3つの指標において有意な交互作用を認めた。評価時点の効果が介入群と対照群で異なっており、介入群は精神的健康、ネガティブ気分が改善を示したのに対して、対照群は自尊感情に悪化を示した。本研究からライフレビューとライフストーリーブック作成プログラムが虚弱な高齢者の心理的QOLを向上させるのに効果的であることが示された。

この研究は「虚弱な高齢者を対象とした心理的QOL向上のためのライフレビューとライフストーリーブック作成プログラムの効果」というタイトルで、本年4月に刊行される『老年社会科学』に掲載される予定である。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 河合千恵子・新名正弥・高橋龍太郎 虚弱な高齢者を対象とした心理的QOL向上のためのライフレビューとライフストーリーブック作成プログラムの効果. 老年社会科学,35 (1) 印刷中 (2013) .
- 2) Hajime IWASA, Ichiro KAI, Yukie MASUI, Yasuyuki GONDO, Chieko KAWAAI, Hiroki INAGAKI Personality and body mass index in elderly people living in the community in Japan. Journal of Aging Research and Clinical Practice, 225–229, (2012) .

1. 研究課題

- (1) 後期高齢期の社会活動継続と ICT (情報通信機器)
- (2) 震災からの復興過程における高齢住民の社会関係と役割の再構築

2. 研究活動の概要

(1) 後期高齢期における社会活動継続と ICT

後期高齢期は、社会関係や活動が縮小していくライフステージに位置づけられている。本研究では、それまでの生活において電子メールや携帯電話などを交流媒体として活用してきた高齢者が、縮小期にある後期高齢期において、どのようにそれらのツールを利活用していくのかを明らかにすることを目的としている。

全会員が前期高齢期から日常的にパソコンなどを活用し、会員の平均年齢が75歳を超える企業退職者集団D会において、タブレット端末の研修などを行っている。直接的に会の活動への参加が困難になるなかで、それまで使ってきたツールに加え、タブレットをどう利活用していくかを明らかにすべく、次年度も社会実験を継続していく。

(2) 震災からの復興過程における高齢住民の社会関係と役割の再構築

3.11の震災から2年が経過するなかで、復興に対する動きは始まったばかりといえる。被災地では復興計画の策定が具体化するなかで、主役である住民の意思をどう反映させていくかが大きな課題となっている。

東京から都市計画、建築を専門とする実践家と研究者が結成した「東京支援グループ」の一員として、津波により住民1/3以上は亡くなり、まちの半分以上が流されたいわき市沿岸部の豊間において、復興計画策定にむけたワークショップを合計12回開催した。結果、顕著な高齢化や水産業の衰退などの震災を機にさらに状況が悪化した震災前からの課題と、放射能の風評被害による観光業の衰退や子育て世帯の減少などの震災後からの課題が明らかになった。これらの状況のなかで、残ることを決意した、残らざる得ない住民たちが、新たな地域コミュニティを形成し、まちを復興させていく過程を、特に高齢住民に焦点をあて、次年度以降も社会実験の手法をとりつつ追跡していく。

3. 研究業績

- 1) 澤岡詩野・袖井孝子・森やす子・荒井浩道・鈴木昭男：中高年男性における他者との電子メールを介した交流；非親族との交流に関するタイ単位の分析から. 第54回日本老年社会科学学会大会（2012/06）
- 2) 荒井浩道・袖井孝子・澤岡詩野・森やす子・鈴木昭男：ICTを活用した高齢孤立防止モデルの評価；テキストマイニングによるインタビューデータの分析. 第54回日本老年社会科学学会大会（2012/06）
- 3) 森やす子・袖井孝子・荒井浩道・澤岡詩野・鈴木昭男：ICTを活用した高齢者の孤立防止の試み；利用者をサポートする地域の中高年に注目して. 第54回日本老年社会科学学会大会（2012/06）
- 4) 澤岡詩野：都市高齢者の加齢のプロセスとICT. 第30回日本都市社会学会大会（2012/9）
- 5) 澤岡詩野：福島県豊間復興支援プロジェクト；住民の手による復興計画策定に向けて. 建築百人展2012（2012/11）

【科研費などの助成金】

平成23年度文部省科学研究費補助金 若手A（平成23～25年 課題番号23683009）
：日常化しつつある都市在宅高齢者の交流媒体としてのインターネットの役割

1. 研究課題

高専賃居住者に対するエンパワーメントを高める取り組みが共助活性化に与える効果

2. 研究活動の概要

【研究業績】

- 1) 査読ある英語論文4編及び査読有る日本語論文4編を執筆した
- 2) 桜美林大学加齢・発達研究所の研究活動として、平成24年度老人保健健康増進等事業「地域包括ケアを支える医療機関と保険者機能連携に関する調査研究事業」における報告書を作成した。

【社会貢献活動】

- 1) かながわ高齢者保健福祉計画評価・推進等委員会の委員としてかながわ県の介護予防事業の推進に従事した。
- 2) 相模原市高齢者保険福祉推進会議の委員として高齢者保険福祉計画作成に従事した。
- 3) 神奈川県座間市においては、一次予防事業としての介護予防サポーター育成に加え、二次予防事業全般にわたり計画・運営に関わった。

3. 研究業績

【学術論文－優秀論文賞】

- 1) 新井智之, 柴喜崇, 渡辺修一郎, 柴田博: 10m歩行における歩行周期変動と運動機能, 転倒との関連－小型加速時計を用いた測定－ 理学療法学 38 (3) 165-172, 2011

【学術論文－学会誌】

- 1) Chika Kuwabara, Yoshitaka Shiba, Miki Sakamoto, Haruhiko Sato: The Relationship between the Movement Patterns of Rising from a Supine Position to an Erect Stance and Physical Functions in Healthy Children Advances in Physical Education 3 (2) , 2013 “in Press”

- 2) Kosuke Mizuno, Yoshitaka Shiba, Haruhiko Sato, Naoto Kamide, Michinari Fukuda, Noriaki Ikeda : Validity and Reliability of the Kinematic Analysis of Trunk and Pelvis Movements Measured by Smartphones during Walking J Phys Ther Sci 25 : 97-100, 2013
- 3) Arai T, Obuchi S, Shiba Y, Omuro K, Inaba Y, Kojima M : The validity of an assessment of maximum angular velocity of knee extension (KE) using a gyroscope Arch Gerontol Geriatr 54 : e175-80, 2012
- 4) Naoto Kamide, Kayoko Takahashi-Narita, Akie Kawamura, Kosuke Mizuno, Yoshitaka Shiba : Determination of the reference value and systematic bias of the functional reach test in Japanese elderly people by meta-analysis Journal of Clinical Gerontology & Geriatrics 3 122-126, 2012
- 5) 安齋紗保理, 柴喜崇, 芳賀博 : 地域在住高齢者における骨・関節系の痛みの変化が生活機能に及ぼす影響 応用老年学6 (1) ; 70-78, 2012
- 6) 畠山浩太郎, 柴喜崇, 植田拓也, 渡辺修一郎 : 地域在住中高齢者における運動実施頻度減少群に見られる特徴-身体機能・IADL・QOLに着目して- 応用老年学6 (1) ; 79-84, 2012
- 7) 安齋紗保理, 柴喜崇, 芳賀博 : 地域在住高齢者の運動機能低下に関連する身体の痛み 日本老年医学会雑誌 49 : 234-240, 2012
- 8) 田中孝祥, 佐藤春彦, 上出直人, 柴喜崇 : ジャイロ併用型加速度計による歩行中の体幹加速度計測の信頼性: 傾斜角に基づく重力加速度補正 バイオメカニズム学会誌 36 (1) , 36-40, 2012

【学術論文—総説・講座】

- 1) 柴喜崇, 西村かおる : 脳血管障害者の排尿障害に対する理学療法 MEDICAL REHABILITATION, 148 15-20, 2012

【学術論文—その他】

- 1) 柴喜崇 (ガイドライン委員会委員) , 望月久 (委員長) : パーキンソン病 理学療法ガイドライン 社団法人 日本理学療法士協会 理学療法診療ガイドライン第1版 pp520-553

【学術論文—一般講演】

- 1) 柴喜崇, 安齋紗保理, 隅田祥子, 小比田協子, 大森圭貢, 上出直人, 石毛里美, 小出かつら, 大塚美保, 大淵修一 : 官学民協働での総合的介護予防の取り組みが住民の互助活動を活性化させる 第47回日本理学療法学術大会 : 1051 , (神戸) , 2012
- 2) 安齋紗保理, 柴喜崇, 芳賀博 : 地域在住高齢者における1年間の骨・関節系の疼痛の変化が生活機能に及ぼす影響 第47回日本理学療法学術大会 : 0337 , (神戸) , 2012
- 3) 水野公輔, 柴喜崇, 池田憲昭, 上出直人, 鈴木良和, 佐藤春彦, 竹内昭博, 平賀よしみ, 福田倫也 : iPod touchを用いた脊柱・骨盤の運動学的評価 第47回日本理学療法学術大会 : 0883 , (神戸) , 2012

- 4) 植田拓也, 柴喜崇, 戸崎麻紀子, 渡辺修一郎: 地域在住中高齢者における自主参加型体操グループへの参加中止に関連する要因 第47回日本理学療法学会大会: 341, (神戸), 2012
- 5) 渡辺修一郎, 植田拓也, 柴喜崇, 畠山浩太郎: 朝のラジオ体操による血圧の変動とその関連要因 日本老年医学雑誌 49 (supplement), p28 628 (東京国際フォーラム), 2012
- 6) 上出直人, 成田香代子, 柴喜崇: 地域高齢者におけるFunctional Reachの参照値 第47回日本理学療法学会大会: 0342, (神戸), 2012
- 7) 新井武志, 大淵修一, 柴喜崇, 大室和也, 小島基永: 高齢者の移動能力と膝関節伸展最大発揮角速度および膝関節伸展筋力との関連性 第47回日本理学療法学会大会: 0089, (神戸), 2012
- 8) 河村晃依, 柴喜崇, 上出直人, 伊勢田幸一, 近田要三, 奥山博之, 神田実穂, 工藤大志, 高橋由香子: 参加者同士の交流に着目した介護予防プログラムの効果 老年社会科学 第54回大会報告要旨号 34 (2), P210 69-10 (佐久), 2012
- 9) 山科典子, 上出直人, 柴喜崇, 河村晃依, 水野公輔, 芳賀博: 都市部高齢者における社会的関係性の生活機能への影響 老年社会科学 第54回大会報告要旨号 34 (2), P233 69-10 (佐久), 2012

【その他ー公開講座】

- 1) 柴喜崇: 公開講座 サクセスフル・エイジングー健やかに老いるー社団法人神奈川県理学療法士会 会長 秋田裕 ミューザ川崎シンフォニーホール 研修室 78, 2012
- 2) 柴喜崇: 地域においてサクセスフル・エイジングを目指すためには? -Aging in Place- さがまちコンソーシアム大学 106 (町田), 2012
- 3) 柴喜崇: シニアの健康づくり講座 「今日から始める! 介護予防ー健康づくりの主役はあなたです!ー」 116 (鎌倉) 鎌倉市長 松尾崇, 2012
- 4) 柴喜崇: 元気な体をつくる「介護予防」ー目指せサクセスフル・エイジング!ー やまと市民大学講座 大和市長 大木哲 126 (大和市生涯学習センター), 2013

【その他ー大衆伝達】

- 1) 河村晃依, 柴喜崇: 県営団地で健康講座 まちかど 神奈川新聞 朝刊 地域: 14, 1110, 2012

【科研費などの助成金】

- 1) 柴喜崇 (研究代表者): 高専賃居住者に対するエンパワーメントを高める取り組みが共助活性化に与える効果 平成23年度科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)), 2011-
- 2) 柴喜崇, 芳賀博 (検討委員会委員長): 「地域包括ケアを支える医療機関と保険者機能連携に関する調査研究事業」平成24年度老人保健健康増進等事業, 2012

1. 研究課題

- (1) 米国における日系高齢者の経験についての研究
- (2) 生殖医療の新たな枠組み構築～非配偶者間人工授精における告知と出自を知る権利に関する研究
- (3) 新型出生前診断導入についての法的・社会的・倫理的問題の研究

2. 研究活動の概要

(1) 米国における日系高齢者の経験についての研究

現在、週に1回ボランティアとして訪問している、米国カリフォルニア州、サンノゼ市にある「Yu-Ai-Kai」という、主に日系アメリカ人の高齢者の利用者が多い高齢者施設で、2013年夏から、日系アメリカ人に日常生活や医療、家族との関係などについて、現在聞き取り調査をすすめている。

調査の対象は「Yu-Ai-Kai」のSenior Day Care Serviceに通ってくる高齢の日系人であり、米国で生まれ育った人も、日本から移民してきた人もいる。調査では倫理的配慮もしており、施設の責任者にも説明したうえですでに許可を得ており、調査に際してはその趣旨を調査協力者の高齢者にも説明し、 Consent フォームで研究協力の同意を得て進めている。さらに協力してくれた高齢者の家族にも、念のためにこうした調査に協力してもらったことを連絡している。今後は、この施設の利用者ばかりでなく、調査対象者をさらに広げて聞き取りをしたいと思っている。現在はプレ調査の段階である。

現在調査に協力してくれる人は、ほとんどが80代から90代前半の人で、記憶があいまいな人もいるが、そうした人には家族に事実確認をしてもらうこともある。多くの協力者が今もなお、日本の文化の影響を強くうけているように見受けられる。こうしたインタビューを通して、日本とアメリカの文化をあわせ持つ環境の中で生きてきたことが、年齢を重ねる上でどのようにシニアの生き方や考え方に影響してきたかを探りたいと考えている。将来的には日本に暮らす高齢者の生き方や考え方とどのような違いがあるのかを探りたいと考えている。

(2) 生殖医療の新たな枠組み構築

～非配偶者間人工授精における告知と出自を知る権利に関する研究

兼ねてより、国内外の非配偶者間の生殖医療について調査をしてきたが、今年度はこうした医療から生まれてきた人とドナーや、遺伝的きょうだいを結びつけるためのリンキングシステムについて、特にアメリカ、イギリスの状況を中心に調査してきた。慶應義塾大学医学部産婦人科学教室の久慈直昭医師が中心となって研究をすすめている厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）の分担研究で、国際医療福祉大学、小田原保健医療学部看護学科の清水清美准教授とともに研究協力者となり、米国のDonor Sibling Registryの創設者や、イギリスのUKDonorLinkの関係者などに直接連絡をとりながら、調査をすすめてきた。そして、日本で親子鑑定などのDNA検査を使用してドナーリンキングシステムを開始する場合の、問題点や課題を検証しているところである。今年の成果については、厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）分担研究報告書「生殖医療の新たな枠組み構築～非配偶者間人工授精における告知と出自を知る権利に関する研究」に収録される。

(3) 新型出生前診断導入についての法的・社会的・倫理的問題の研究

2012年秋、日本国内で新型出生前診断（NIPT）の臨床を開始すると言う報道がなされ、日本臨床倫理学会の医療関係者から、米国ではとくにダウン症などのトリソミーの染色体異常のスクリーニングの実施状況やそれに対する社会的な反応などを調べて欲しいとの依頼を受けた。そこで、米国生殖医療学会（ASRM）に参加し情報収集するとともに、文献検索と最近米国で出産した女性や医療関係者へのインタビューや中心に調査をすすめた。この結果については、日本臨床倫理学会雑誌に投稿。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 仙波由加里（2013年10月）特集いのちをめぐる現在：不妊治療・生殖医療の現在—そのあり方を考える、『季刊 セクシュアリティ』No.58、エイデル研究所、34-43ページ。
- 2) 久慈直昭、清水清美、仙波由加里（2013年3月）生殖医療の新たな枠組み構築～非配偶者間人工授精における告知と出自を知る権利に関する研究、『厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）分担研究報告書』印刷中。

【論文】

- 1) 仙波由加里（2013）アメリカにおける出生前検査—ダウン症スクリーニング、『臨床倫理』No1、日本臨床倫理学会、54-57ページ。

【学会発表】

- 1) Yukari Semba (Sept. 2nd, 2012) , Surrogacy in Japan, iCSI Patient' s Perspective on ART, 4th Congress of ASPIRE, in Osaka, Japan.

【その他の研究活動】

- 1) 研究報告 仙波由加里（2012年9月7日）、Donor Conceptionで生まれた人のドナーの非匿名情報を得る権利、生殖テクノロジーとヘルスケアを考える研究会（東京大学）
- 2) American Society for Reproductive Medicine (ASRM) 2012 San Diego (Oct. 20-24, 2012) にて、情報収集、および他国の研究者たちとの情報交換。
- 3) 米国CPMC Sutter HealthのMedical Ethics Committee (San Francisco) の会議にobserverとして参加。とくに高齢者医療（認知症やアルツハイマー患者で、患者の希望がわからない場合の医療方針の決定や、医療費未払いと医療の継続の是非についての問題など）の事例から、米国の高齢者をめぐる医療の問題を検討。
- 4) 倫理学の教育教材として、丸善出版社を通して、ドラマ仕立てでケーススタディー用のDVDを制作中。

1. 研究課題

高齢者のスピリチュアリティに関する研究

2. 研究活動の概要

- 1) 今日、急速な高齢化の進展の中で、地域で生活する高齢者の健康を考える時に、高齢者のニーズに応じて、QOLの高い日々を過ごせるように、スピリチュアルの側面からの援助はますます必要となろう。そこで、2009年に地域で生活する高齢者の「生きる」こと概念を生成して、その概念からスピリチュアリティの有り様を把握するための高齢者スピリチュアリティ尺度を開発した。その後、その尺度を用いた調査を行い、地域高齢者の健康増進の取り組みの一つにスピリチュアリティの側面からの援助をどのように進めていくかを検討している。

現在までに、開発した尺度を用いて次の3地域で調査研究を行った。現在、取り組んでいるのは調査研究のまとめと地域高齢者の健康増進の一つの取り組みとして、スピリチュアリティ支援のためのシステムやプログラムを開発するための基礎的資料づくりである。

研究1：東京近郊外来受診調査研究（2008）

研究2：兵庫県都市近郊調査研究（2011）

研究3：首都圏中核都市調査研究（2012）

首都近郊都市では高齢福祉課の協力により、尺度を使用したアンケート調査を実施し、その集団が持つスピリチュアリティと関連要因の関係を明らかにした。高齢福祉課への報告、アンケート協力者への報告と勉強会を計画しつつある。今後の取り組みと課題はスピリチュアリティ支援のための組織作り、ワークショップ、支援プログラムの開発・実践・評価を繰り返し、スピリチュアリティ支援の必要性を提言したいと考えている。

- 2) スピリチュアリティに関する学際的な視野を持つ、「東京スピリチュアルケア研究会」の世話人として企画・運営に携わっている。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 三澤久恵：第6章いまを生きる高齢者のスピリチュアリティそのケアを求めて－老年看護の視点から，99-121，窪寺俊之監修，スピリチュアルケアの根底にあるもの－自分が癒やされ、生かされるケア－，遊戯社，2012.

【論文】

- 1) 三澤久恵：医療・保健・福祉・生活におけるスピリチュアル支援，第25回日本看護福祉学会学会誌，2012.
- 2) 三澤久恵：尺度開発と尺度を活用したスピリチュアリティ支援の方向性と課題，日本臨床死生学会－スピリチュアルケアの実現に向けて－，聖学院大学，(2013. 6. 予定)

【学会発表】

- 1) 畠山玲子，菅野夏子，三澤久恵，小林由美，新野直明：郊外の地域高齢者のスピリチュアリティ概念に関する研究－地域高齢者を元気づけ勇気づけてくれるもの－，老年社会科学，34 (2) ，249, 2012.
- 2) 三澤久恵，菅野夏子，畠山玲子，小林由美，新野直明：郊外の地域高齢者のスピリチュアリティと関連要因，日本老年看護学会，第17回学術集会，213, 2012.
- 3) 三澤久恵，小林由美，清水由美子，畠山玲子，新野直明，菅野夏子：首都中核都市における地域高齢者のスピリチュアリティ得点と要因の関係，日本健康医学会，21 (3) ，146-147, 2012.

【公開講座】

- 1) 三澤久恵：高齢者のスピリチュアリティについて，桜美林大学大学院，2012.

【その他の研究活動】

東京スピリチュアルケア研究会の世話人として2012年度は桜美林大学大学院老年学研究科の協力により、以下の5回の企画・運営に携わった。

第10回	2012年5月25日（金）18：00～20：00 桜美林大学大学院四谷キャンパスB1ホール 講師：野尻雅美（千葉大学名誉教授） 講演テーマ：高齢者のQOLとスピリチュアリティ
第11回	2012年7月20日（金）18：00～20：00 桜美林大学大学院四谷キャンパスB1ホール 講師：庭野元孝（千葉県立佐原病院総合診療科部長） 講演テーマ：日本の医療の動向－病院でのエンディングの取り組み－医療におけるスピリチュアルケアの実践－より良いチーム医療で、地域の看取り推進
第12回	2012年10月26日（金）18：00～20：00 桜美林大学大学院四谷キャンパスB1ホール 講師：高橋明美（高橋社会福祉事務所長） 講演テーマ：特別養護老人ホームにおける看とり介護～福祉現場からの実践報告～
第13回	2012年12月14日（金）18：00～20：00 桜美林大学大学院四谷キャンパスB1ホール 講師：Ph.D. Masami Takahashi（イリノイ州立ノースイースタン大学心理学部准教授） 講演と映画の夕べ：スピリチュアリティ－表と裏（元特攻隊員へのインタビューから）
第14回	2013年1月18日（金）18：00～20：00 桜美林大学大学院四谷キャンパスB1ホール 講師：葛西賢太（宗教情報センター研究員） テーマ：ケア、セルフケア、相互ケア－宗教から学び宗教を活かす

1. 研究課題

高齢者のうつ予防のためのポピュレーションアプローチの実証研究

2. 研究活動の概要

高齢期はうつ病になりやすい要因が増える時期であり、うつ病は自殺と関係する病気として高齢期の最も重要な精神健康問題である。しかし、予防重視型介護予防施策では、うつリスクのある高齢者に対する対策が遅れている。本研究は、地域高齢者を対象としたうつ予防・支援のため、応用可能な新たなポピュレーションアプローチ方法を提供することを目的とし、ポジティブ心理学的アプローチを主なツールとしたうつ予防プログラムの有効性について高齢者の抑うつ状態、その他のメンタル面に及ぼす短期、中長期的な影響について検討する。

学会等の活動については2009年度より蓄積したデータを基に2013年度開催されるIAGG (The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics) で「Cross-cultural Comparative Studies on the Effectiveness of Positive Psychology Approach in Preventing Late-Life Depression Among Older Adults Residing in Japan and Korea」をテーマとするシンポジウムで「Prevention of Late-Life Depressive Symptoms」を演題とし発表予定である。また、IPPA (The Third World Congress on Positive Psychology) に1演題「Medium-to Long-term Effectiveness of Positive Psychology Approach in Preventing Depressive Symptoms of the Community Elderly」を登録した。

結果の概要：うつ予防プログラム実施することにより、高齢者のうつ状態、不眠、不安の改善が明らかになり、さらに幸福感の向上が見られた。さらに1年後の追跡期間中にその効果は維持されていることが明らかになった。高齢者のうつ予防プログラムの有効性が示され、さらに、二次予防対象者および一般高齢者向けのプログラムとして妥当であることが示された。

以上の研究活動により、高齢者向けうつ予防プログラムの確立に向け、学術的な評価を行い、さらに学術誌に投稿する準備を進めている段階である。

2012年度の研究実施状況は、東京都のF市と新潟県のN市の2自治体においてポピュレーション版うつ予防教室を3教室とハイリスク版のうつ予防教室11教室合計14教室実施した。

普及啓発活動として、高齢者向けの講演会、講座を計7回、従事者研修を3回、結果報告会2回、自主グループの合同会2回を実施した。

また、研究成果を基に従事者向けのシンポジウムを2013年度計画中である。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 兪今：うつリスクを有する地域高齢者のうつ状態のリスク要因. 第27回日本老年精神医学会；東京2012
- 2) 安順姫、兪今、兪峰、崔範日：中国東北農村地域における高齢者の主観的幸福感に関連する要因—後期高齢者の主観的幸福感を中心に—. 第54回老年社会科学大会；長野2012
- 3) 安順姫、兪今、兪峰：うつ予防プログラムの介入が高齢者の主観的幸福感に及ぼす影響. 第71回日本公衆衛生学会総会；山口2012
- 4) 兪今、兪峰、安順姫、崔範日、方今女：高齢者のうつ状態に寄与するリスク要因.—中国吉林省農村地域を対象とした研究—. 第77回日本民族衛生学会；東京2012
- 5) 安順姫、兪今、兪峰、崔範日：高齢者における心理的幸福感に影響する社会的要因—中国吉林省農村地域を対象とした研究—. 第77回日本民族衛生学会；東京2012
- 6) 崔範日、兪峰、安順姫、兪今：中国高齢者の活動能力とその関連要因—中国吉林省農村地域を対象とした研究—. 第77回日本民族衛生学会；東京2012

【科研費などの助成金】

- 1) 高齢者のうつ予防のためのポピュレーションアプローチの実証研究
(文部科研費 平成24年度～平成26年度) (代表者)

【その他の研究活動】 報告書

- 1) 兪今：平成23年度府中市介護予防事業「ハッピー教室」実施報告 (2012. 04)
- 2) 兪今：府中市介護予防事業「うつ予防教室」の事業評価—平成23年度— (2012. 12)
- 3) 兪今：平成23年度府中市介護予防事業「ハッピー教室」実施報告 (2013. 03)
- 4) 兪今：国際保健事業の長期的評価事業 (H22年度～H29年度) —中国地域保健事業の長期的評価のためのプレ調査研究—平成23年度調査報告書 (2012. 04)

1. 研究課題

特別養護老人ホームにおける機能訓練指導員の取り組みとその意図するものに関する研究

2. 研究活動の概要

本研究課題は、修士論文として取り組んだものである。その内容を精査し、必要な改善を行い、学会発表、雑誌への投稿に取り組んだ。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 植田大雅, 杉澤秀博「特別養護老人ホームにおける機能訓練指導員の取り組みとその意図するもの」第54回日本老年社会科学学会. 2012. 6. 9-10, 佐久.
- 2) H. Ueda, H. Sugisawa, New goals for functional training instructors working in nursing homes, the 45th Australian Association of Gerontology National Conference, 20-23 November 2012,, Brisbane.

1. 研究課題

- (1) 高齢者の居場所の研究
- (2) 高齢者の健康生活診断指標に関する研究
- (3) 高齢者疑似体験における授業研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の居場所の研究

高齢者が日中過ごす場所や、過ごす場所での居心地、過ごし方と健康との関連について継続して研究している。高齢者が利用できる自由性の高い日中過ごす場所のひとつである「福祉センター」をフィールドとして、まず、「老人福祉センターを利用することによる『よりよい健康』を維持する効果」の検討（2009）次に高齢者の利用状況や過ごし方における利用継続の可能性（2010）、老人福祉センター利用のきっかけとなる動機（2011）を基盤として2012年は、福祉センターを居場所とした高齢者が「いくつにみえる？」と聞くことばに潜む心情を考察し、学会に発表した。

(2) 高齢者の健康生活指標作成に向けての研究

小玉敏江先生を代表とする「高齢者生活診断の指標の作成にむけての研究」において共同研究者として聖路加看護大学老年看護研究会に参加し、介護支援専門員を対象として高齢者への質問表内容について表面妥当性の検討（2010）、高齢者を対象として質問表内容の使用感についてインタビューを行った（2011）。有用性のある結果が得られ2012年度は、学会で研究協力者として発表した。

(3) 高齢者疑似体験における授業研究

看護学生を対象とした「在宅を想定した高齢者疑似体験演習」における授業研究をおこなった。学生の演習後の振り返りレポートによる学習内容の特徴を考察し、学会で発表した。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 上野佳代、長田久雄、菊池和美；高齢者が年齢を聞かれた際に生じる感情 – 高齢者が「いくつに見える？」と聞くことばに潜む心情を探る – 第54回日本老年社会学会；長野（2012）
- 2) 上野佳代、長田久雄、菊池和美；在宅を想定した高齢者疑似体験における学習内容の特徴 – 看護学生による高齢者疑似体験による学習実態から – 第17回日本老年看護学学会；金沢（2012）
- 3) 小玉敏江、上野佳代；高齢者の健康生活診断の診断指標およびウェルネス型アセスメントの枠組みに関する研究：診断表の作成と有用性の検討 第18回日本看護診断学会；京都（2012）

1. 研究課題

- (1) 放送の現場は今
- (2) 高齢者とラジオ～その暮らしに寄り添う“こころ”のメディア
- (3) 高齢者の生き方や人生哲学を、番組にして紹介する

2. 研究活動の概要

(1) 放送の現場は今

高齢社会の進展により、高齢者を主題にした、あるいは高齢者をターゲットにした番組が、少しずつ目につくようになってきた。正しい高齢者像を伝えるために、メディア、とりわけテレビの果たす役割は大きい。では、そのテレビの番組を制作する放送の現場は、いったいどういう人たちで構成されているのか。また、その人たちはどんなキャリア・パスをもち、どういう働き方をしてきたかなどについて、15人の共同研究者とプロジェクト・チームを組み、全国30名の放送人にインタビュー調査を行い、論考をまとめた。研究は、ジェンダーとメディアをテーマにする研究グループ GCN=Gender and Communication Networkのメンバーですすめた（林香里／谷岡理香 共同代表）。放送の現場について知ることは、高齢者とテレビの関わりを考察する上で重要な意味を持つものと考ええる。

(2) 高齢者とラジオ～その暮らしに寄り添う“こころ”のメディア

未曾有の災害となった東日本大震災では、ラジオのもつ機動力・有用性があらためて認識された。生活情報を入手する情報源としての役割はもちろん、避難生活が長引き不安な日々を送る中で、「いつもの声」が心の励ましになったというリスナーも多かった。また、日常的にラジオを生活の中心に据え、心の拠り所としている高齢者も少なくない。中には、番組に投稿し意見発表の場にしたたり、ラジオを通じて語り合う“ラジ友”との交流をしたりと、ラジオが社会との窓口になっている場合も多い。ラジオはパーソナルメディアであるということはよく言われているが、こと高齢者との関わりにおいては、知的好奇心をくすぐり、そのQOLを高める大きな一助となっている。15年にわたり番組キャスターとしてラジオに関わってきた経験を活かし、高齢リスナーにインタビュー調査を行い、ラジオが高齢者の暮らしにどう溶け込み、どんな役割を果たしているのかを探る。

(3) 高齢者の生き方や人生哲学を、番組にして紹介する

様々な分野で活躍する高齢者。放送を通じてその生き方や人生哲学を紹介し、同世代には生きる力を、若い世代には未来への希望を感じてもらいたい。

3. 研究業績

【著者】

- 1) 「日本のテレビ記者（仮）」（共著）大月書店から2013年夏 出版予定

【その他の研究活動】

- 1) 「聞いて聞かせて」（NHKラジオ第2 2013年2月17日放送）で、視覚障害者への理解と命の尊さを訴える活動を20年以上続けている盲学校の元教頭（68）を紹介。

1. 研究課題

タクティールケアの効果を心理的、身体的側面から効果を検証し、認知症高齢者のケアに取り入れる有効性を示すエビデンス明らかにする

2. 研究活動の概要

タクティールケアは、高齢者保健医療福祉の現場で導入されるようになり、継続的にタクティールケアの効果について研究を行っているが、健康および気分にあぼす効果に対する研究は十分明らかではないため、健常女性を対象に健康関連QOLおよび二次元気分尺度を用いて、タクティールケアが健康および気分にあぼす効果について明らかにした。

2013年度日本看護研究学会で以下二報を発表予定

- 1) タクティールケアの生理機能および心理的側面にあぼす効果（第一報）：自律神経・脳活動にあぼす影響
- 2) タクティールケアの生理機能および心理的側面にあぼす効果（第二報）：健康関連QOL・気分にあぼす影響

3. 研究業績

【その他】

- 1) 2012年日本認知症ケア学会東海地域大会ワークショップ：「認知症の人に寄り添うタッチを用いたケア：癒しを目的とした人に触れるケア（タクティールケア）」
- 2) 鈴木みずえ，木本明恵，原智代，千葉京子：はじめてみよう！タクティールケア．クオリティ出版，東京（2012）．
- 3) 木本明恵：おはよう21連載「タクティールケアことはじめ～相手に寄り添うこと～」，中央法規出版会社
- 4) 木本明恵：在宅・施設の看護で生かそう！利用者が心地よくなる“手”でふれるケアーアロマセラピー／指圧・マッサージ／タクティールケア／リンパ浮腫のケアー，「コミュニティケア」12月臨時増刊号，日本看護協会出版会，東京（2012）

1. 研究課題

- (1) 在宅高齢者の食生活改善活動の検討
- (2) 特定保健指導における栄養指導活動
- (3) アンチエイジング栄養セミナー実施

2. 研究活動の概要

(1) 在宅高齢者の食生活改善活動の検討

現在、介護保険制度において、地域の高齢者のうち要支援・要介護になるおそれのある高齢者を対象に、栄養改善プログラムを含む介護予防事業が全国で実施されている。高齢になると咀嚼能力や消化・吸収率が低下し、食事摂取量の低下や栄養の偏りにより、体力の低下をきたしやすくなることから、低栄養のリスクのある自立した在宅高齢者に対して、疾病の改善や健康維持などの介護予防のための食生活改善活動が重要となっている。

高齢者の低栄養の原因としては、噛む力の低下や体重減少、腰痛や膝痛等から日常生活活動が低下するなどの身体的要因、家族や友人との交流の減少の他、経済等の社会的要因、認知症やうつ状態などの精神的要因、その他、病気、怪我、手術など、多くの因子が絡み合っている。

本研究では、高齢者を対象に、独居と同居の家族構成から捉えた食習慣や食生活の意識等実態を検討した。また、高齢者の食生活の実状を研究し、栄養指導を行うことで、低栄養の改善と予防を図るため、介護予防事業において食生活改善活動を実施した。

1コース2回の栄養改善プログラムを7コースにわたり97人の人に高齢者1次介護予防事業を実施した。

1コース8回の栄養改善プログラムを3コースにわたり24人の人に高齢者2次介護予防事業実施した。

また、平成24年度の介護予防事業（運動機能向上プログラム、栄養改善プログラム、口腔機能向上プログラム）に参加した修了者を対象に事後フォローの教室を1回、実施した。

(2) 特定保健指導における栄養指導活動

2008年4月からは、「特定健診」の結果により健康の保持に努める必要がある者に対する「特定保健指導」の実施が義務づけられた。糖尿病等の生活習慣病有病者・予備群を25%減少させ、中長期的な医療費の伸びの適正化を図る目標を達成するために、標準的な健診・保健指導プログラム（特定保健指導）が実施されている。

特定保健指導は、内臓脂肪症候群（メタボリックシンドローム）に着目し、その要因となっている生活習慣を改善するための保健指導を行い、糖尿病等の有病者・予備群を減少させることが目的とされている。対象者は40歳～74歳を対象者として健診を行い、受診者に保健指導を行うこととされており、今回は積極的支援が必要な勤労者に対し、生活習慣病予防のための栄養指導を実施した。

年3回にわたり10人の人に生活習慣病の予防及び改善のための栄養相談を実施しました。

(3) アンチエイジング栄養セミナーの実施（華学園栄養専門学校主催・台東区市民公開講座）

高齢者の多くは、テレビ等のマスメディアの過大なPRにより、断片的な栄養知識をもっているものの、基礎的な栄養教育を受けた経験が少ないことで、疾病予防や健康維持のための基本的な食生活の知識や実践手法を十分にもたない人が多い。本事業は、地域高齢者の自立した食生活を支援するため、栄養知識や料理の工夫などの教育手法を取り入れた健康づくり教室を実施することで、栄養専門学校の利点を活かして地域高齢者の健康づくりに貢献するものである。

年3回にわたり9人の人に食生活や栄養に関する講習会を実施した。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 久喜美知子：虚弱高齢者の食生活の実態－独居と同居の比較－，華学園栄養専門学校
研究紀要 第1巻第1号，p6-11，学校法人 華学園華学園栄養専門学校，平成24年6月15日

【学会発表】

- 1) 久喜美知子：虚弱高齢者の食生活の実態～独居と同居の比較～，日本栄養改善学会，平成24年9月14日，名古屋国際会議場

【その他の研究活動】

1) 第3回楽しさアップ!おいしさアップ食育フェア (相模原市主催)

相模原市食育推進計画に基づき実施したイベントに相模原市栄養士会役員として協力

日時：平成24年10月28日 (土)

場所：ジャスコ相模原店1階 パブリックスペース

内容：テーマ「あなたの塩分の感じ方、どれくらい? 適塩体験してみましよう」

2) 幼児の食育

鳩川幼稚園 平成24年11月8日 (木) : 幼児食保護者講習会「子どもの健康と食生活」

1. 研究課題

- (1) プレイバック・シアターの効果に関する研究
- (2) 身体感覚ワークによる中高年の感情・気分に関する介入研究

2. 研究活動の概要

(1) プレイバック・シアターの効果に関する研究

プレイバック・シアター（Playback theatre：以下PTと表記）とは、対話と分かち合いのための即興劇である。劇には脚本はなく、進行役のコンダクターが、ある参加者の体験してきたある日あの時の出来事を聴き（語る人をテラー）、その場で打ち合わせ無しで演じ（演じる人をアクター）、その場を見守る観客が集う“ストーリー”によってつくられる即興劇場である。芸術的な側面を持つ一方、共感や理解、新しい気づきをひろげ、人間的成長を促すものである。劇場の舞台や、ワークショップ、福祉領域、教育領域、産業領域、医療領域、記念行事や民族同士の相互理解の場など、仲間づくりや人間関係を学ぶ手段として広く活用されている。

PTの研究はまだ少なく、どちらの研究も方法論や事例検討であることが多い。そこで、本研究では、気分や感情の前後にどのような変化があるのかを検討した結果、PTにより気分が落ち着き穏やかでリラックスした安定的な状態になることが示唆された。PTは身体活動を行いグループ形成していく点から、活性度を高める効果もあることが示唆され、心の安定が上昇し、無気力・抑うつ感が改善されたことを明らかにした。また、PTは観る・語る・演じることを通して内面を出すことで語り手は自分を外在化し、観る人や演じる人にも気づきや共感を深めることを明らかにした。

(2) 身体感覚ワークによる中高年の感情・気分に関する介入研究

身体活動を通して、自分らしくある感覚やタッチングによるからだの感じを検証し、世代による感情・気分の比較の検討を行った。分析人数を増やすため継続中である。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 久米喜代美・山口創、プレイバック・シアターの効果に関する研究、2012.09.1-2、日本健康心理学会第25回大会発表論文集、日本健康心理学会、東京家政大学

【その他の研究活動】

- 1) 人間関係力向上プログラムの実施と評価に関する研究（共同研究）
- 2) 児童虐待防止研究会
- 3) 相模原市高齢者福祉課「あじさい大学」第1回～第10回 健康講座講義と実践

1. 研究課題

高齢者の生活習慣とQOLの向上に向け、食事摂取の安全性や在宅で生活する高齢者の健康維持について

2. 研究活動の概要

特別養護老人ホーム入居者の安全な食事援助に向けて、介護職員を対象に、講義を担当している。内容は、①嚥下のメカニズム、②嚥下障害のある利用者の食事介助、③嚥下障害のある人の嚥下リハビリテーションについて実施している。

在宅で生活する高齢者の健康管理のためには、訪問看護は重要であり、訪問看護師の仕事継続について、インタビューしてまとめている。

3. 研究業績

【学会発表】

1) テーマ「訪問看護師の仕事継続プロセス—仕事と家庭の両立—」

第17回 日本在宅ケア学会学術集会において、発表する。

内容：高齢者を取り巻く今後の状況として、後期高齢者が増大し、認知症高齢者の増加、がん患者の増加、在宅での看取りの増加などに伴い、訪問看護を必要とする高齢者が増加し、訪問看護ニーズも高まるが、訪問看護に従事する看護職員数は、伸び悩んでいる。在宅療養者の生活をささえるためには、訪問看護師の仕事継続は重要である。今回、訪問看護師の仕事継続プロセスを明確にすることで、仕事と家庭の両立を示唆する。対象者：訪問看護ステーション2か所で協力を得られた9名である。

結果：①【訪問看護のきっかけ】があり、仕事と家庭の両立のためには、【働きやすい環境】と【家庭の安定】が相互に【バランス】がとれて、【仕事継続意思】に繋がっていた。

著者：小浦さい子・畠山玲子・杉澤秀博

1. 研究課題

- (1) 訪問リハビリテーションの介入効果とリスク管理に関する研究
- (2) 日常生活活動動作に伴う困難感を定量化する指標の開発に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 訪問リハビリテーションの介入効果とリスク管理に関する研究

訪問リハビリテーション（訪問リハ）が在宅要介護高齢者に与える効果を明らかにする研究を企画し、対象者や用いるアウトカム指標、介入内容について、渡辺ゼミにて検討を行った。検討の結果、適切なコントロール群や介入内容を準備することが難しいという結論に達したため、コントロール群を設定した介入研究は中止となった。

訪問リハにおけるリスク管理に関する研究は、訪問リハにおける様々なトラブルを未然に察知し、回避する能力を身につけるというコンセプトのもと、看護領域で用いられている「危険予知トレーニング」を応用した書籍を出版した。また、日常生活活動能力が低下している在宅要介護高齢者をスクリーニングするための指標に関する臨床研究を行い、学会発表を行った。

(2) 日常生活活動動作に伴う困難感を定量化する指標の開発に関する研究

高齢者の日常生活活動動作に伴う主観的な困難感を定量化する指標の開発に関する研究を企画し、調査票を作成した。渡辺ゼミにて検討を行い、平成25年4月に孺恋村で予備調査を行う予定である。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 石黒友康, 大森 豊, 齋藤崇志 編集：訪問リハ危険予知トレーニング. 医歯薬出版株式会社, 2012

【論文】

- 1) 齋藤崇志, 平野康之, 大森祐三子, 大森豊, 渡辺修一郎: 訪問リハビリテーションにおける多職種連携の取り組み 客観的評価に基づく情報提供が有効であった一症例を通して. 理学療法: 技術と研究, 40: 59-64, 2012

【学会発表】

- 1) 齋藤崇志, 大森祐三子, 大森豊: 在宅要介護高齢者の心身機能とBarthel Indexの関連. 一女性要介護高齢者における検討一. 第47回日本理学療法学会大会. 2012年5月26日.

1. 研究課題

高齢者の社会貢献（ボランティア活動）が及ぼす、心身への影響について

— ジョブパートナー事業 —

2. 研究活動の概要

1) ジョブパートナー事業とは、お元気な高齢者が支援者（有償ボランティア）となり、知的障害者（児）とパートナーを組むことにより、就労の支援をする事が目的である。

本年度は、多摩市と中野区において、知的障害者（児）と支援者（お元気な高齢者）に、「ヘルパー2級」の資格を取得させ、介護者としての育成をした。

多摩市：知的障害者	11名	中野区：知的障害者	9名
精神障害者	2名	精神障害者	2名
ジョブパートナー	14名	ジョブパートナー	14名

さらに、ジョブパートナーに対して、本事業に参加する事により、どのような心身への影響や効果があったかを明らかにするために「主観的幸福感尺度」、「生活満足尺度K」によるアンケート調査を実施し、現在、分析中である。

2) 知的障害者（児）及び高齢者向けの、介護職員初任者研修用のテキストをユニバーサルデザインで作成し、発行した。（500冊）

3. 研究業績

【著書】

- 1) 渡辺修一郎、高橋千由利、栗岩和恵著、NPO法人ケアサポートらくらく編著
「介護職員初任者養成講座テキスト」2013年3月

【助成金】

独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成金（研究代表者）

- 目 的
- ①高齢者の生きがい作り
 - ②お元気な高齢者及び知的障害者（児）の新たな雇用の場の創設
 - ③介護人材の確保

【講演・その他】

- 1) 韓国カトリックサンジ大学にて「日本の介護事情及び高齢者の現状について」講演
2012年9月
- 2) NPO法人ケアサポートらくらくにて、韓国カトリックサンジ大学からの短期留学生を受け入れ、「福祉現場実習」「ヘルパー2級資格習得研修」実施（韓国カトリックサンジ大学と協定）2012年12月～2013年1月

1. 研究課題

- (1) 高齢者の自己実現に関する研究
- (2) 高齢者の社会貢献活動に関する研究
- (3) 高齢者の『終活』に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の自己実現に関する研究

地域在宅高齢者（鹿児島県霧島市在住65～79歳の高齢者を住民基本台帳から500人を無作為抽出）を対象に、自己実現に関連する要因の分析・考察。

(2) 高齢者の社会貢献活動に関する研究

地域在宅高齢者（鹿児島県霧島市在住65～79歳の高齢者を住民基本台帳から500人を無作為抽出）を対象に、社会貢献活動に関連する要因の分析・考察。

(3) 高齢者の『終活』に関する研究

近年、中高年の間で、『終活』が話題となっている。『終活』とは、「人生の終わりのための活動」の略であり、人間が人生の最期を迎えるにあたって行うべきことを総括したことを意味する言葉（ウィキペディアより）とされている。元気なうちから、終活によって、自らの将来を見据える。自分を見つめ直すことで、新たな発見をしたり、大切な人や事を思い出したりと「人生の締めくくりをデザインすることは今をよりよく生きること」につながり、また自己決定を促し、高齢者の残された人生の質にも影響を与えることであると考えられる。このような側面からの実証研究は、未だ取り組まれていないため、現在、研究方法等を検討中である。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 地域在宅高齢者の自己実現に関連する要因
桜美林大学大学院老年学研究科老年学雑誌, 第3号, p.1-18, 2013.
- 2) 地域在宅高齢者の社会貢献活動に関連する要因
千葉科学大学紀要, 第6号, p.119-129, 2013.

1. 研究課題

介護予防・地域支え合い事業のアクティビティ・ケアプログラムに関する研究

2. 研究活動の概要

地域で実施されているアクティビティプログラムに参加し実地調査を2009年度から続けている。今年度は二つのプログラムに参加し実地調査を実施した。

- 1) 東京都 A市：地域包括センターで開催されている高齢者の自主プログラム（太極拳 月二回）

参加する地域の高齢者ボランティアにより運営される。

講師への謝礼などは参加費用を徴収しまかなう。

参加者数：平均20名

- 2) 神奈川県 B市：公民館で開催されている生活習慣病予防のための高齢者向け料理教室

講師：食生活改善推進団体の会員

この団体は市保健所が主催する「食生活改善推進員養成講座」の修了者で自主的に組織しており、会員数約400名

当該公民館担当者は約10名

料理教室参加者 各回20名の地域高齢者

1. 研究課題

- (1) 女性定年退職者の生活と考え方
- (2) 地方自治体の高齢者に対する具体的な施策

2. 研究活動の概要

(1) 女性定年退職者の生活と考え方

女性定年退職者の退職後の楽しみ・生きがい：現役時代の経験との関連について」
(老年学雑誌 創刊号 (2011年3月) に寄稿、掲載された論文) 論文内容を抜粋し英訳

(2) 地方自治体の 高齢者に対する具体的な施策

- 1) 三鷹市 ワークショップ 実施補助
「三鷹市地域ケアネットワーク設立にむけた連雀ワークショップ」
(杉澤秀博教授 全体進行)
地域住民グループの話し合い 司会進行 まとめ
実施日 7月28日
- 2) 武蔵野市地域包括支援センター運営協議会 公募委員となる
会議出席 6月1日、6月6日、11月30日
- 3) 武蔵野市民社会福祉協議会 老人施設 ボランティア研修受講
武蔵野市高齢者施設見学
老人施設、介助 ボランティア実習 など

3. 研究業績

【学会発表】

1) “The Influence of Work Experience on Pleasure of Retired Women”

ポスター発表 45th Australian Association of Gerontology National Conference

(第45回 オーストラリア老年学会) 11月20日-23日 於 ブリスベーン会議展示センター

1. 研究課題

地域における認知症予防に関する研究と実践：回想法と傾聴法とを利用した閉じこもり予防のための自己効力感向上方法の研究と地域に認知症予防に関する知識の普及

2. 研究活動の概要

- 1) 厚生労働省は昨年わが国の認知症を持った高齢者の推定数を最新データで見直した。その結果、その数はこれまでの推定数を大幅に上回り、すでに305万人に達していると思われると発表した。このように認知症を持った高齢者が急速に増加している。

このことはさらに多くの患者本人や介護する家族に苦痛を与えることになるだけでなく、国民医療費を押し上げる大きな要素ともなっている。

このような状況の下で求められているのは、在宅高齢者の認知症予防である。そして現在の地域包括ケアシステムの下では、その役割を担っている中心は地域包括支援センターである。しかし1つのセンターの守備範囲は広い。私の自宅をテリトリーとしている地域包括支援センターは、約6,000人の高齢者をその守備範囲に抱えている。またどの地域包括支援センターも介護予防活動を実施しているが、それに参加している高齢者の数は参加が望まれている数の10%にも達していない。

このような現状で認知症予防を効果的に進める方法は、認知症に対して高いリスクを有するグループに特化した認知症予防活動と、一般の人々に対する認知症予防に関する知識の普及である。

高リスク・グループの一つは閉じこもりがちな高齢者である。彼らは外出に対する自己効力感が低いという研究がある。閉じこもり予防には高齢者の外出に対する自己効力感の向上が強力な手段と考えられる。

グループ回想法で自己効力感を高めることができることは、09年に実施した地域の老健との共同研究で明らかにした。

これまで老年学を研究し、また傾聴法及び回想法のボランティアとしての9年に及ぶ活動の中で自己効力感向上方法の臨床的な知を修得した私としては、地域包括支援センターや在宅高齢者に介護サービスを提供しているケアマネジャーとも協力して、傾聴法と回想法を利用した高齢者の自己効力感の向上と閉じこもり予防についてさらに研究を深めたい。

また地域包括支援センターとも連携して、認知症予防に関する知識を普及させたい。

2) 上記に関連して活動したこと。

横浜市港南区の地域振興課から区民企画事業として認定を受け、2010年以来3年にわたって「学ぼう！認知症予防の”わ”」と題する養成講座を開催し、合計約90人の参加者に認知症予防の理論と、対人支援技法である傾聴法と回想法を習得してもらった。

これらの人々は地域包括支援センターとも協力して、自宅周辺にいる認知症について高いリスクを有する人々に働きかけ、外出に対する自己効力感を高めて、地域包括支援センターが開催する認知症予防活動に参加するよう活動することを期待している。

また地域の町内会、ボランティア団体などに対して、認知症とその予防の知識を伝える活動も行っている。

これらの活動の具体的内訳は次の3. 研究業績に詳述してある。

3. 研究業績

【講演・その他】

前記（2）に関連して実施した活動は以下の通りである。

1) 自治会、自治会連合会など主催の講演会

年 月 日	主 催 者	講 演 テーマ
12年5月17日	横浜市港南区笹下町内会	認知症とは何か、予防法は
13年3月1日	横浜市港南区上大岡自治会連合	心を結ぶ傾聴を学ぶ

2) 地域包括支援センター主催講演会など

年 月 日	主 催 者	講 演 テーマ
12年6月27日	港南中央地域ケアプラザ（横浜市港南区）	傾聴の理論と実技
12年10月5日 ～11月30日	港南中央地域ケアプラザとの共催 （横浜市港南区）	講座「学ぼう！認知症予防の”わ”」 （6回）
13年1月28日	港南中央地域ケアプラザ（横浜市港南区）	認知症を知り、予防しよう

3) 自治体、企業、団体などからの依頼によるもの

年 月 日	主 催 者	講 演 テーマ
12年10月13日 ～12月8日	川崎市役所高齢者福祉課	傾聴の理論と技法およびボランティア活動につながる実践的な指導（全7回）
12年12月4日・ 5日・17日	(株) ツクイ (社員研修として)	認知症とは何か、その予防法は
13年1月11日	傾聴ボランティアグループ「モモ」 (横浜市瀬谷区)	回想法とは何か
13年2月	傾聴ボランティアグループ「とも」 (川崎市麻生区)	心を結ぶ傾聴のお話

4) 回想法の提供

期 間	主 催 者	講 演 テ ー マ
12年2月20日 ～4月23日	グループホーム「さくら」(横浜市南区) 1階でグループ回想法を実施	8セッション
12年5月14日 ～6月25日	グループホーム「さくら」(横浜市南区) 2階でグループ回想法を実施	同上
12年7月2日 ～現在	グループホーム「さくら」(横浜市南区) にてグループ回想法を週一回、1階およ び2階で継続して実施	毎週1回のペースで継続中
12年5月7日 ～現在	福島県被災者の個人宅で回想法を実施	月1回のペースで継続中
13年3月6日～	特別養護老人ホーム「よつば苑」 (横浜市保土ヶ谷区)の認知症棟で グループ回想法を実施	8セッション

【助成金】

- 1) 講座「学ぼう！認知症予防の”わ”」は横浜市港南区の区民企画事業と認定され、5万円の助成金を受領した。

1. 研究課題

- (1) 高齢者の QOL と社会貢献の向上に資する研究
- (2) 活力ある高齢社会構築に資する公共政策研究
- (3) 健康寿命延伸に資する公益ビジネス政策研究
- (4) 大衆長寿社会における老年学の普及、啓蒙に資する研究

2. 研究活動の概要

- (1) 高齢者の QOL と社会貢献の向上に資する研究
産学公民協働型フュージビリティースタディーの推進
- (2) 活力ある高齢社会構築に資する公共政策研究
地域公益活動団体と、地方公共団体との新・連携推進
- (3) 健康寿命延伸に資する公益ビジネス政策研究
健康増進産業クラスター形成の推進
- (4) 大衆長寿社会における老年学の普及、啓蒙に資する研究
高・大連携によるエイジング論共通科目化の推進

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 公共政策プロジェクト 2011年10月～ 成熟社会総合フォーラム委員（北海道庁）
- 2) ドラッグストア業界大手企業と老年学普及に関するヒアリング、意見交換
- 3) エイジング教育に関するヒアリング、意見交換（地方議会議員政策PTほか）

1. 研究課題

- (1) シニアマーケット関連の調査、設計、実施、報告
- (2) 高齢者の特徴と犯罪に関する研究
- (3) 高齢者の家庭内死亡事故に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) シニアマーケット関連の調査、設計、実施、報告

- ・ 高齢者をメインターゲットとする商品・サービスに関する市場調査
- ・ 高齢者をメインターゲットとする商品・サービスの企画一式（調査設計・実査・分析・報告等）
- ・ 高齢者の行動調査の設計、実施、分析、等
- ・ 某リサーチ会社による、シニアマーケットに関する研究プロジェクトに参画。過去数十年に渡るデータを基に、高齢者の消費行動を分析・考察

(2) 高齢者の特徴と犯罪に関する研究

(3) 高齢者の家庭内死亡事故に関する研究

- ・ 警察政策学会の「超超高齢社会化研究会」に参画
 - － 隔月で行われる研究会に参加
 - － 研究会が主たるシンポジウム等に協力
- ・ 日本市民安全学会に参画
 - － 毎月行われる研究会に参加

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 堀内裕子
分科会3 高齢者の安全安心：セーフコミュニティ型シニアライフスタイルとは
「シニアスタイルの創造」
第9回日本市民安全学会小諸大会, 小諸市, 2012年9月24日
- 2) 塚原新一, 堀内裕子, 加治佐康代, 小木真, 森本栄一：
シニアの消費行動における世代効果－エイジングイベントの視点から－
第7回日本応用老年学会大会, 横浜市, 2012年11月9日

【講演】

- 1) 2012年4月13日 杉並区役所 協働事業：高齢社会を楽しく歩く
「生（いき）活（いき）」知識 『あなたはどっち？正常老化と病的老化』
- 2) 2012年4月27日 株式会社ビデオリサーチ エイジングラボ
『高齢者・高齢社会を理解する』
- 3) 2012年5月28日 公益財団法人アジア生命保険振興センター OLIS-SUFE 2012 Chinese
『日本の高齢社会問題』
- 4) 2012年6月11日 日本レストランコンサルタント協会 定例会ゲストスピーカー
『誰にでも訪れる正常老化・介護を考える』 ジェロントロジー（老年学）
の視点より
- 5) 2012年7月22日 豊島区 区制80周年、SCアジア地区ネットワーク会議 協賛事業
区民のための実践的安全創造講座
『これからのシニアライフデザイン（高齢者の事故予防）』
- 6) 2012年10月17日 CSネットワーク 生き生き倶楽部 『シニアライフスタイルの創造』
- 7) 2012年10月27日 川崎アリーナ 年金セミナー 『定年後のライフプランを考える』
- 8) 2012年11月16日 公益財団法人アジア生命保険振興センター 川井記念OLISアジア生命
保険シンポジウム
『シニアマーケット ヒット商品の考え方～ジェントロジーの視点から』
- 9) 2012年12月6日 株式会社ビデオリサーチ創立50周年記念 VR Forum2012
コミュニケーションインテリジェンス ～提供から提言まで～
『変わるシニア 変わらないシニア』
- 10) 2013年1月19日 埼玉県所沢市役所 平成24年度防犯指導者養成講座『高齢者と防犯』
- 11) 2013年1月28日 某通販会社 社内研修・勉強会 『シニアマーケット攻略のツボ』
- 12) 2013年2月4～5日 長野県小諸市役所 市職員研修『シニアライフスタイルの創造』

- 13) 2013年3月8日 横浜国立大学 横浜国立大学大学院環境情報研究院シンポジウム
 新たな価値の創造としてのイノベーション（環境情報研究院基軸プロジェクト「文理融合研究のシナジーを通じた研究教育の革新～社会環境と情報部門をフィールドとして～」）
 『シニアマーケットとイノベーション』未解明なシニア像を導き出す
- 14) 2013年3月14日 IAアネックス 女性ビジネス研究会
 『ジェロントロジーとマーケティング』未解明なシニア像を導き出す

【執筆・その他】

- 1) 生活事典 6-3, 6-4一部 テキスト改訂
- 2) 堀内裕子. 巻頭「高齢期を豊かに生きるために」－老化を理解し安全・安心に暮らす－. 住まいと電化 日本工業出版社vol.25 2013 January
- 3) 堀内裕子. 交通事故よりこわい「家庭内事故」豊島区セーフコミュニティ・サミット抄録集. 2012,10,2
- 4) 堀内裕子. やさしい老年学No.3 「高齢者力（結晶性能力とメタ記憶）. あんしん（春号）. 安全センター(株)・山武ケアネット(株). 2012. 4
- 5) 堀内裕子. やさしい老年学No.4 「運動すると、体にも脳にも良くなってほんと？（「サルコペニア」ってご存知ですか？）」. あんしん（夏号）. 安全センター(株)・山武ケアネット(株). 2012. 7
- 6) 堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました31. 「高齢者と犯罪」Vオレオレ詐欺③. TECHNOプラス 福祉介護2012；4：61
- 7) 堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました32. 「外より危険！家の中」①. TECHNOプラス 福祉介護2012；5：42
- 8) 堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました33. 「外より危険！家の中」②. TECHNOプラス 福祉介護2012；6：32
- 9) 堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました34. 「外より危険！家の中」③. TECHNOプラス 福祉介護2012；7：36
- 10) 堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました35. 「老いを考える（老年学）」①. TECHNOプラス 福祉介護2012；8：26
- 11) 堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました36. 「老いを考える（老年学）」②. TECHNOプラス 福祉介護2012；9：38
- 12) 堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました37. 「老いを考える（老年学）」③. TECHNOプラス 福祉介護2012；10：5
- 13) 堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました38. 「高齢者とスケール（HDS-R）」
 I. TECHNOプラス 福祉介護2012；11：20
- 14) 堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました39. 「高齢者とスケール（MMS）」
 II. TECHNOプラス 福祉介護2012；12：27

- 15) 堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました40 「高齢者とスケール（老研式）」Ⅲ. TECHNOプラス 福祉介護2013；1
- 16) 堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました41 「高齢者とスケール（バーセルインデックス）」Ⅳ. TECHNOプラス 福祉介護2013；2；25
- 17) 堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました42 「高齢者とスケール（GDS）」Ⅴ. TECHNOプラス 福祉介護2013；3
- 18) 堀内裕子. 「ジェロントロジーをもっと知りたい」25 「ヒートショックに細心の注意」. 保険情報新聞2012. 4. 27；第2573, 4
- 19) 堀内裕子. 「ジェロントロジーをもっと知りたい」26 「地域包括ケアの実現へ第一歩」. 保険情報新聞2012. 6. 8；第2579, 5
- 20) 堀内裕子. 「ジェロントロジーをもっと知りたい」27 「自覚しにくい正常老化を見抜く」. 保険情報新聞2012. 8. 17；第2588, 4
- 21) 堀内裕子. 「ジェロントロジーをもっと知りたい」28 「老年学の要素を凝縮「生・活」検定」. 保険情報新聞2012. 10. 12；第2595, 3
- 22) 堀内裕子. 「ジェロントロジーをもっと知りたい」29 「簡易知能評価スケール（認知症検査）」. 保険情報新聞2012. 1. 4；
- 23) 堀内裕子. 「ジェロントロジーをもっと知りたい」30 「高齢者スケール（老研式・バーセルインデックス）」. 保険情報新聞2013. 3. 15；第2616, 4

【その他の研究活動】

- 1) 日本応用老年学会事務局活動
- 2) 「平成24年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）」サポート業務

1. 研究課題

- (1) 看護（職）と介護（職）の連携の促進
- (2) 看護実践における経験知の集積と分析

2. 研究活動の概要

(1) 看護（職）と介護（職）の連携の促進

9年間にわたり看護職と介護職の連携促進について看護・介護職を対象として研究を継続してきたが、そこから

- ①看護職が医学的知識を高め、優れたケア技術に習熟すること
- ②看護職が介護職と日常生活ケアを協働すること
- ③看護・介護職双方が遠慮なく意見を出し合える「環境作り」が重要であること の3つが抽出できた。そこである高齢者施設の看護・介護の連携会議に毎月参加し、討論し、③に関して研究を進めたいと思った。許可を得て録音し、分析を継続している。

(2) 看護実践事例における経験知の集積と分析

看護実践事例集積研究会（主任研究員 川島みどり日赤看護大学名誉教授）に所属しているが、専門雑誌（15誌）、学会報告集など事例報告に含まれる経験知を精練・集積して、「多くの臨床現場に活用できる看護技術」に技術化し、事例毎に命名して分類する作業していくことを目的に2002年5月から継続し、2007年4月1日、ホームページを立ち上げた。これまで、730の個票をインターネット上で公開した。今年度は131の個票を集積、計861の個票を公開して出来る予定。毎月、研究会を行い、個票作成を分担し、月1回の研究会でグループに分かれ2次チェックを行い、さらに3次チェックを経て、実践事例を公開している。これまで、文部科学省科学研究補助金（研究成果公開促進費）を2009年から毎年受けている。

3. 研究業績

【科研費などの助成金】

- 1) 平成24年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）（代表者 平松則子）

【学会発表】

- 1) 前田志名子：介護老人福祉施設で生活している高齢者を支えているもの：第22回日本健康医学学会（三重）

【その他の研究活動・社会活動】

- 1) 相模原看護専門学校非常勤講師（老年保健論担当）
- 2) いなぎ苑（稲城市の介護老人福祉施設）において評議員。
- 3) 介護認定審査会委員（東京都稲城市・世田谷区）
- 4) 東京スピリチュアルケア研究会（三澤久恵世話人）

1. 研究課題

(1) 在宅要介護高齢者の心身状況と入浴頻度に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 在宅要介護高齢者の心身状況と入浴頻度に関する研究

①研究の背景

介護保険が導入され、介護サービスは要介護認定を受ければ利用できることになっているが、サービス利用状況には差があり同じ介護像であっても入浴頻度に差が生じている。介護保険施設においては、週2回の入浴が標準化されたケアであり、どのような身体状況であっても週2回の入浴（又は清拭）が担保されている。しかしながら、在宅サービスの供給量が一見十分な地域であっても、入浴頻度が週1回以下の要介護高齢者が存在する。

「介護支援専門員の資質向上と今後のあり方に関する調査研究」（株式会社日本総合研究所平成24年3月）のケアプラン詳細分析結果報告では、「ケアプランに日常生活のスケジュールが記載されていない事例が多い」と指摘しており、サービス量・スケジュールの把握は容易であるが、生活実態はつかみにくい状況である。

②研究の目的

在宅要介護高齢者の入浴頻度はどれくらいなのか実態調査を行い、またその頻度になっている要因を明らかにし、サービス提供のあり方の提言を行う。

③研究方法

介護支援専門員を対象にアンケート調査を行う。現在、調査協力可能な法人・事業所を打診している段階である。

1. 研究課題

- (1) 特別養護老人ホームの介護職員の仕事継続プロセス
—5年以上継続している介護福祉士の場合—

2. 研究活動の概要

- (1) 特別養護老人ホームの介護職員の仕事継続プロセス
—5年以上継続している介護福祉士の場合—
の雑誌投稿準備

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 特別養護老人ホームにおける中堅介護福祉士の仕事継続意思
老年社会科学32(2) : 237-237. 2010

平成24年度研究活動報告

発行：桜美林大学加齢・発達研究所
〒194-0294
東京都町田市常盤町3758
TEL. 042-797-2661 (代)

発行日：平成25年3月31日

印刷：(有)片野印刷